西ノ岡遺跡発掘調査報告書

1981・3

鳥取県八頭郡船岡町教育委員会

序

このたび、船岡町大字福井字西ノ岡地内に、町営新農業構造改善事業西ノ岡地区ほ場整備事業が計画実施されることになりました。この付近一帯は、埋蔵文化財の包蔵が予測される土地であります。

このため工事により埋蔵文化財が破壊される恐れもあるので、町文化財保護委員会の意見を聴取した結果、事前の予備調査が必要であると認め、昭和55年6月3日発掘調査に着手いたしました。

例年になく異状なまでの冷夏のためか、悪天候に悩まされ調査も困難でありましたが、初期の目的を達成し、多くの成果を挙げて無事に調査を終了いたしました。

これは、ひとえに県文化課文化財主事森田純一氏の適切なご指導・ご助言と、終始献身的に調査にたずさわっていただいた松下利秀主任調査員の両氏、並びに作業にご尽力いただいた町文化財保護委員を初め、地元関係者の方々に対して、厚くお礼申し上げます。

昭和56年3月20日

鳥取県八頭郡船岡町教育委員会教育長
西　尾　親　義

例　　言

1．この報告書は、町営新農業構造改善事業西ノ岡地区ほ場整備事業の実施に伴なって行なった埋蔵文化財発掘調査の記録である。

2．調査は、船岡町教育委員会が「西ノ岡遺跡発掘調査」として、国･県の補助を受け行なった。

3．期間は、昭和55年６月３日に着手し56年３月20日に終了した。

4．調査の実施にあたっては、適宜県文化課の指導助言を得た。

5．本書の作成は、松下利秀が執筆編集した。

6．トレンチ分布図については、町産業課作製の1/1,000地形図を使用した。

7．本書に使用した方位は全て磁北を示す。

8．遺物の保管は、船岡町教育委員会で行なっている。

調　査　組　織

（調査主体）　船岡町教育委員会

（調査団長）　西尾親義（船岡町教育委員会教育長）

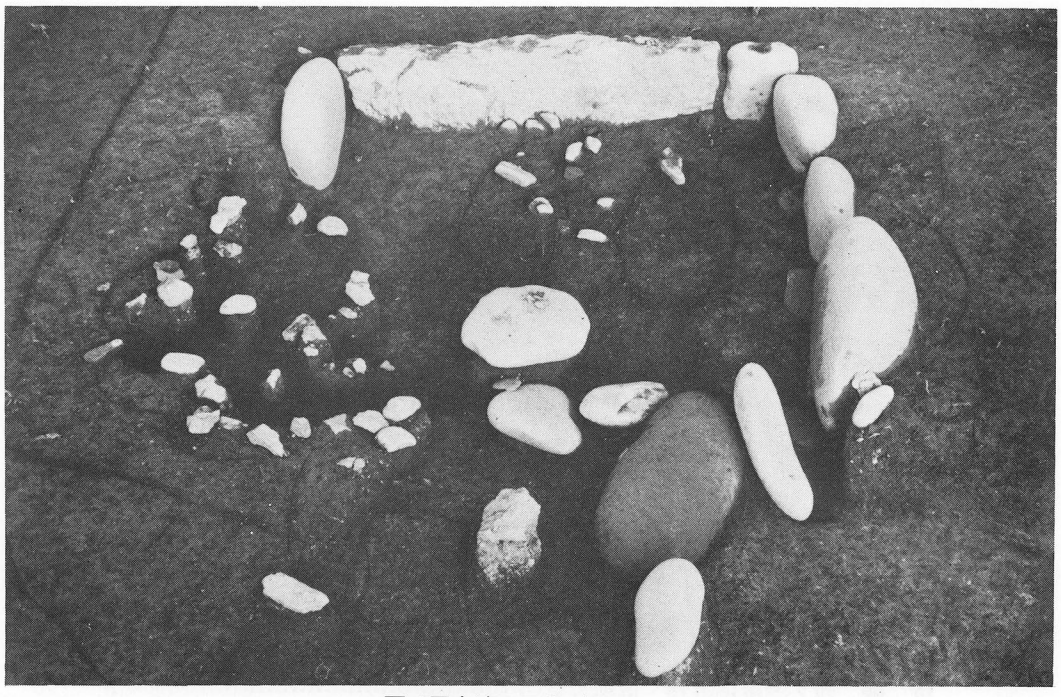
（調査指導）　森田純一（鳥取県教育委員会文化課文化財主事）

（主任調査員）　松下利秀

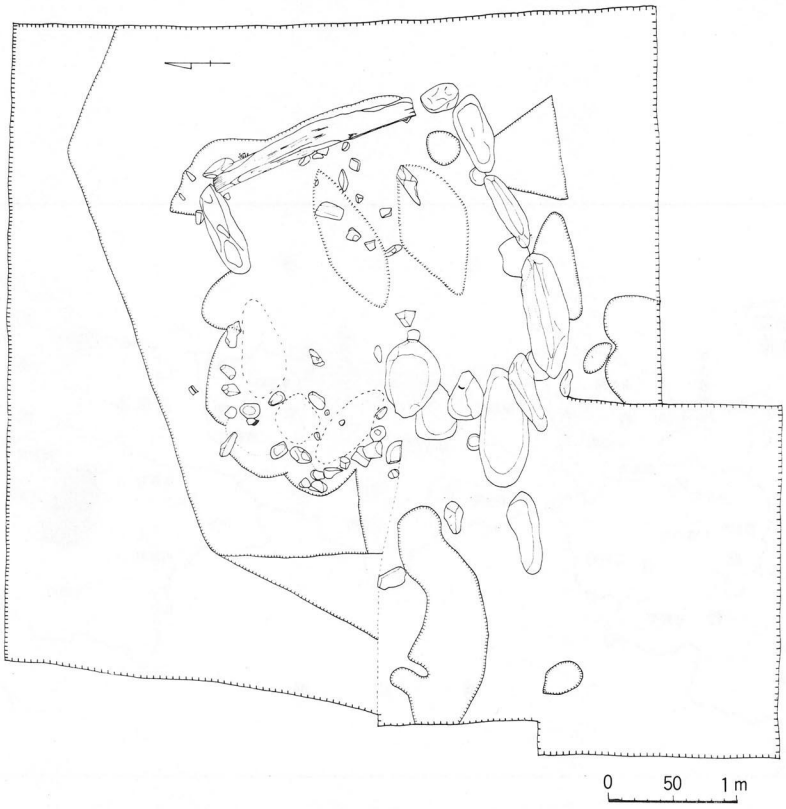
（調　査　員）　中家誠次、木下俊雄、浦林寿男、田中登貴男、西尾政美（以上、船岡町文化財保護委員）、田中一男、橋本正太郎、谷口雅美智（以上、船岡町教育委員会）

（作　業　員）　岩見一郎、木嶋孝明、橋本信治、岩成熊治、木下正人、井田春野、井田たつ子、木下すみ江、岸田美智子、浦林はる江、木嶋普美子、小橋和江、橋本和江、橋本道子、西田登喜子、田渕和子、山本正子

（事務担当）　竹尾雅詮（船岡町教育委員会社会教育主事）



西ノ岡古墳の石室（南西より）



第１図　西ノ岡古墳平面図

目　　次

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境……1

船岡町の遺跡と神社の分布図……2

西ノ岡遺跡トレンチの分布図……3

第Ⅱ章　調査の概要……4

1　A_1・A_2トレンチ……4

2　Bトレンチ……6

3　C_1・C_2トレンチ……8

4　D_1・D_2・D_3トレンチ……11

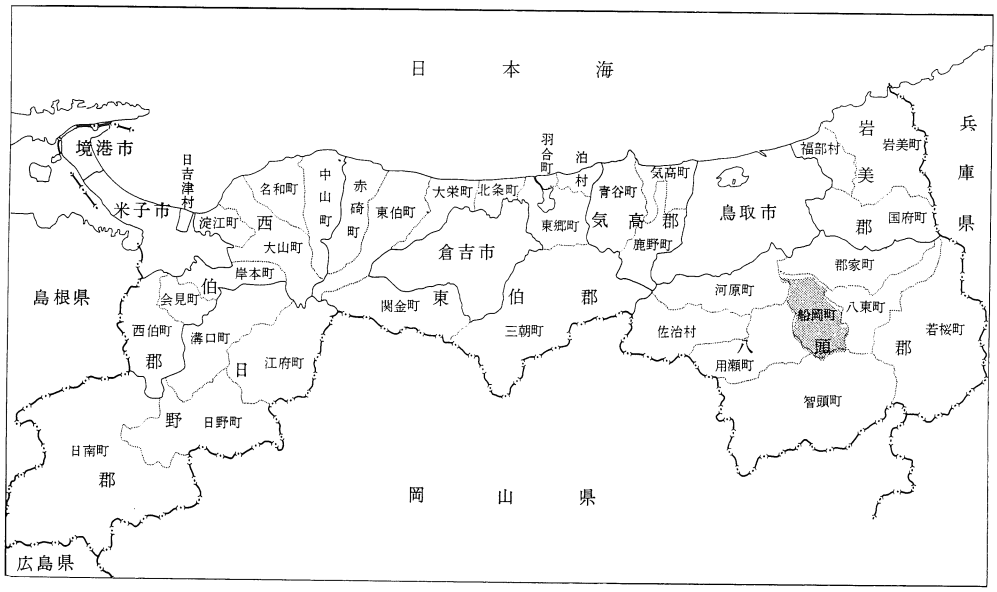
5　E_1・E_2トレンチ……20

6　Fトレンチ……20

7　西ノ岡古墳……23

付　録　西ノ岡遺跡遺物・遺構写真……31

あとがき……40



船岡位置図

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境

八東川中流域左岸、千代川河口より約24kmの所にある西ノ岡遺跡は、新第三系中新統の鳥取層群下部層を基盤とする海抜高度70～80m の沖積扇状地に位置している。

この遺跡の下位には、遺跡との比高 6 ～10m で中位段丘（約 3 万年前の洪積段丘）が隼小学校付近から上野・下濃にかけて広がり、その下位の低位段丘との比高も 3 ～ 6 m あり、段丘面が比較的よく保存されている地域である。

この遺跡から八東川への最短距離は約500m あり、下流へ約 4 kmの地点の私都川右岸には白鳳時代後期の創立と推定されている国指定史跡の土師百井廃寺(註①)がある。そして岩永実(1959)(註②)は旧八上郡内における方格地割を字名より推定しており、これを船岡町遺跡分布図に使用した 5 万分の 1 地形図で見ると、私都川流域では口縄手・三反田(花原)。漆ケ坪（石田百井)。六反田・八反田(宮谷)。があり、八東川流域では石ヶ坪・柿ヶ坪（三谷)。梅ヶ坪（坂田)(下濃)(西御門)。坪の内(殿)。石ガ坪・漆ガ坪(日下部)とあり、地形的には低位氾濫原をさけ高位氾濫原乃至第ⅠⅡ段々丘上に見出されるとして、奈良時代にはこの付近一帯に条里が施行されていたと推定している。

また、今回の発掘に前後して調査した牧野遺跡、丸山遺跡では弥生時代中期の土器を検出しており丸山遺跡では中世の遺構・遺物も出土している。そして西ノ岡遺跡のC_2 トレンチでは、奈良時代後半期と推定される円面硯が出土している事により、この付近の主要な建造物があったとも考えられ、この地域一帯は早くから開けていたものと推定される。

西ノ岡遺跡の地形について見ると、基盤礫岩の上位をクロボク又はロームの二次堆積物が薄く被覆する沖積扇状地と判断され、部分的には第三紀丘陵と呼ぶべき所も見られる。

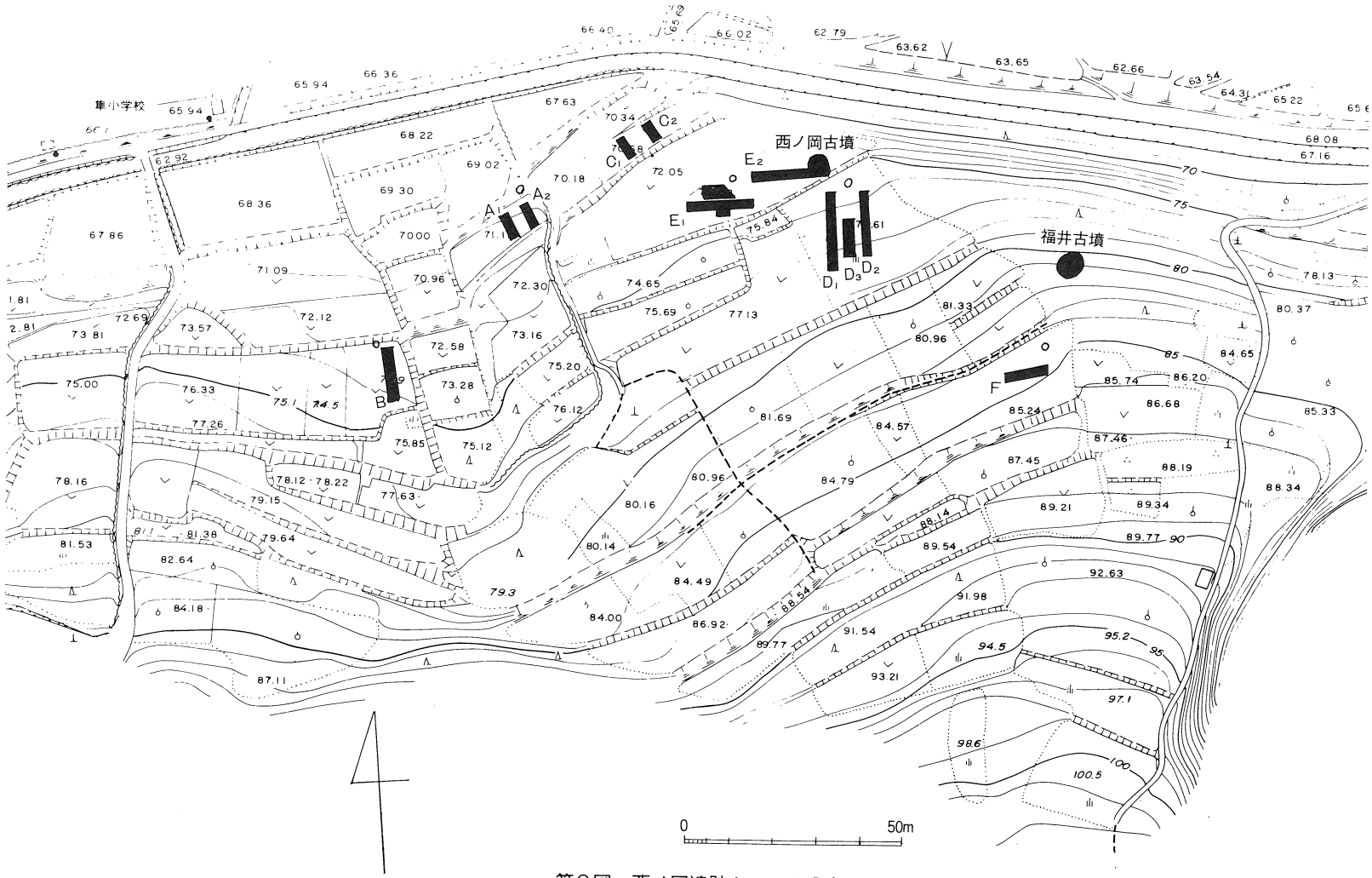
Ａ・Ｄトレンチで土層断面を見ると、概略的に地表から基盤礫岩までの間に二層の明褐色土層が認められ、基盤礫岩を含めると三つの文化層として識別出来ると考えられる。下位のものから、弥生時代後期・古墳時代前期そして奈良時代に対比出来るのではないかと考える。またC_2 トレンチの土層断面より奈良時代後半期以後宝町時代までに 2 回の地形的に安定して土壌の層相分化の進行した時期があったものと推定される。つまり、Ａ・Ｄトレンチでの二層の明褐色土層は沖積扇状地形成過程の中で、土石流堆積物が土壌化して行く過程での層相分化による集積層又はＤ層（基盤）に相当するものと判断され、C_2トレンチで見られる斑紋土層も同質のものと解釈すると、計 5 回の地形的に固定されていた時期を弥生時代以降に推定出来る。

西ノ岡遺跡で確認された遺構として弥生時代後期と奈良時代後半期の住居址そして古墳時代後期の古墳が挙げられるが、この事より牧野遺跡(註③)と同様の印象を受ける。つまり弥生時代後期から古墳時代前期にかけてこの地区は住居区として使用され、古墳時代後期には聖域として墓地として使用され、奈良時代後半期には再度住居区として使用されていたものと推定される。この現象が地域一帯に共通するものであるならば、その原因を究明する必要が生じてくる。

①梨ノ木古墳　⑤大平谷古墳　⑨牧野遺跡　(A)野々宮神社　(E)隼神社　(G)水口神社
②下荒神古墳　⑥栗坪古墳　⑩橋本遺跡　(B)下野(シモノ)神社　(F)西谷神社　(H)大江神社
③丸山遺跡　⑦福井古墳　⑪半柵城址　(C)下船岡神社
④神明古墳　⑧西ノ岡遺跡　(D)上船岡神社

注－1　○は遺跡を示し、●は神社を示す。
注－2　国土地理院発行1：50,000地形図「鳥取南部」「若桜」図幅より抜粋。

第2図　船岡町遺跡・神社分布図



第3図　西ノ岡遺跡トレンチ分布図

第Ⅱ章　調査の概要

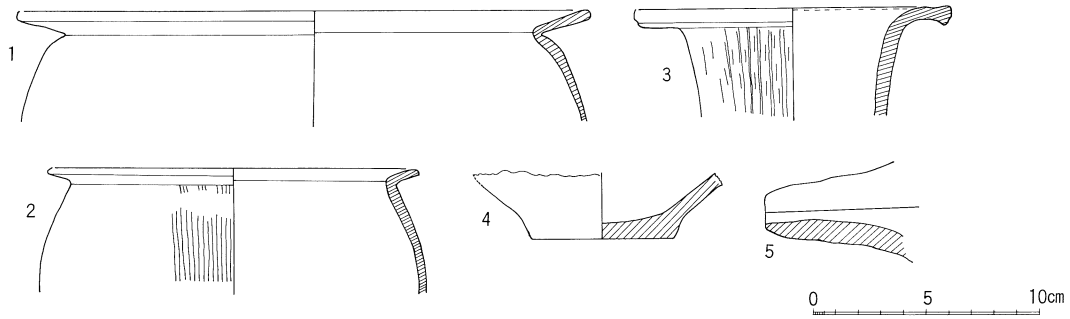
船岡町大字福井字西ノ岡地内で第２図遺跡分布図に見るように福井古墳（現状はヒノ木の25年生におおわれているが墳形は円墳か方墳で墳丘崖下（北方）に舟川―昔高瀬舟が通った枝川―が流れている。規模は直径12m・高さ 1.5m である。)が認められており、また付近に土師器片が散布している為に何らかの遺跡の存在が推定されていた。そこで、この遺跡の性格・規模等を明確にするための試掘調査を実施した。

（Ⅱ－１）A_1・A_2 トレンチ

A_1 トレンチ表土下40～55cmで弥生土器底部（三片）、甕（２片）、注口土器の注口部（１個）、壺（1片）その他を検出しているが、遺構としては方形状の落ち込みを第４図の如くに感ずるのみで明確には認める事が出来なかった。

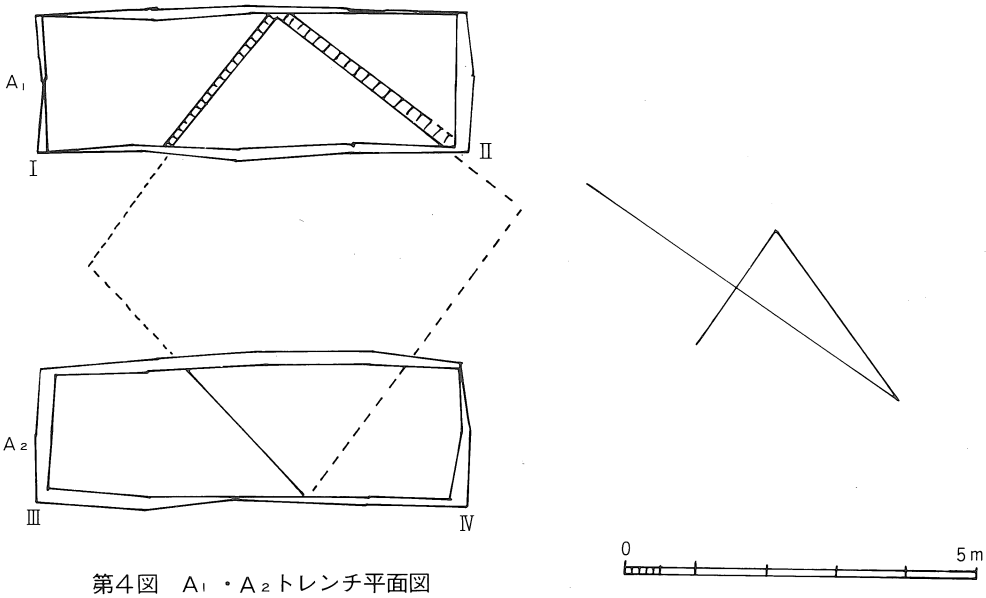
従ってA_1・A_2トレンチでは、その出土状況より弥生時代後期頃の文化層が地表下40～55cmのところにあると推定される。又、その他の遺物として、奈良時代から平安時代を指示する須恵器片（高台）を表土層より認めている。

遺物実測図－Ⅰ

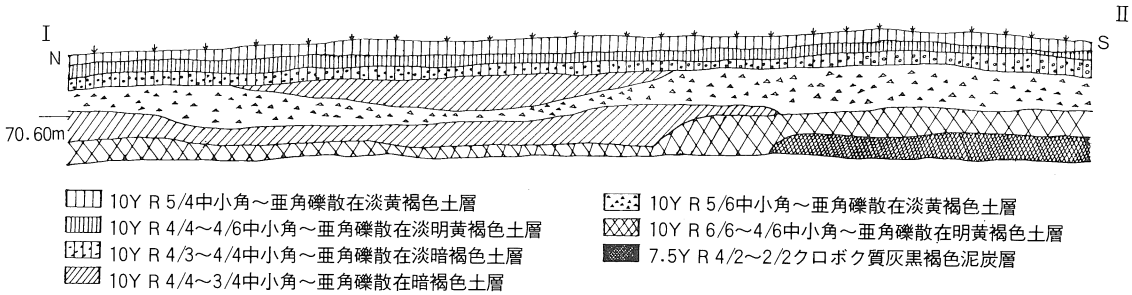


A_1・A_2 トレンチ出土物一覧表

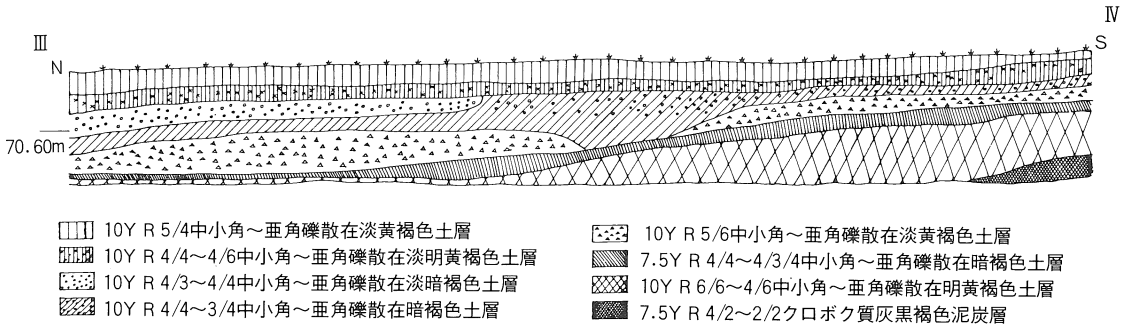
遺物番号	器種	色調	胎土	焼成	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	備考（出土地点）
1	甕	浅黄	粗砂点在 細砂散在	やや軟質	口径 25.2	鋭い「く」の字の口頸部 口縁端部やや肥厚	不明	A_1 トレンチ　―40cm
2	甕	にぶい橙	均質細粒	やや軟質	口径 16.0	鋭い「く」の字の口頸部 均等厚の口縁部	胴上部から頸部にタテハケメ	A_1 トレンチ　―40cm
3	長頸壺	にぶい黄褐	均質細粒～微粒	やや硬質	口径 14.0	直立気味外傾頸部 大きく開き垂下気味の口縁端部	外面頸部タテハケ 内外面口縁部ヨコナデ	A_1 トレンチ　―48cm
4	弥生土器底部	浅黄	均質細粒 粗砂点在	やや軟質	底径 6.2	一端立上がって広がる	不明確	A_1 トレンチ　―65cm
5	弥生土器注口部	にぶい橙	均質細粒 粗砂点在	やや硬質	口径 1.5 注口長 5.8	外面端部を丸くおさえる。	ヘラオサエ？	A_2 トレンチ　―80cm



第4図　A1・A2トレンチ平面図



第5図　A1トレンチ東壁地層断面図



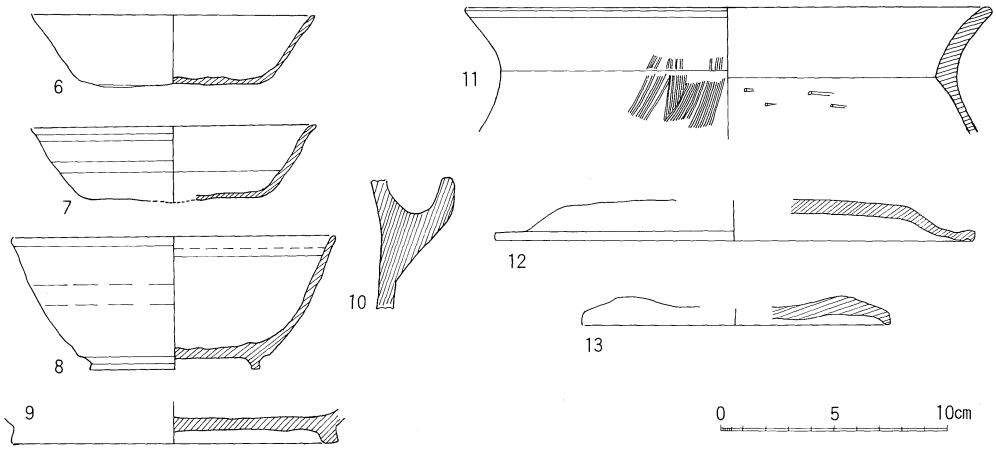
第6図　A2トレンチ東壁地層断面図

（Ⅱ－2）Ｂトレンチ

本トレンチ全体では17個のピット状遺構と1基の土壙(南西部より供献土器と考えられる土師質土器片を認めている)、そして北端部で溝状遺構を検出している。この内、遺物を伴出したピットはNo.5・9・14ヶ所であり、灰白色を呈した高台のある坏や壺の耳を検出した。また北端部の溝状遺構からは須恵製・土師製の小片を認めたが計測に値するものは認められなかった。

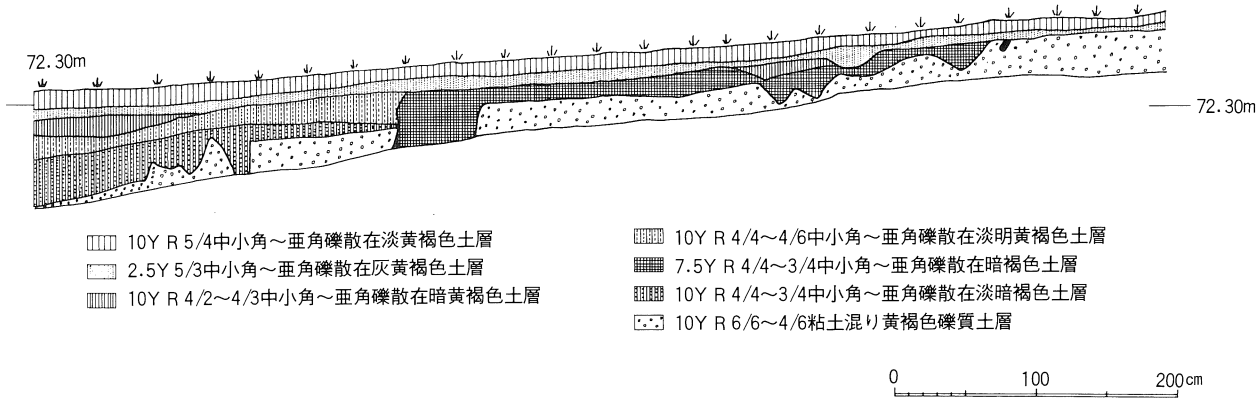
ピット状遺構の配列状況より、N 20°Eの傾きをもつ建造物が推定され、出土物より八世紀（奈良時代）頃の掘立柱式の建物であり、この北端部には自然地形を切り込んで深さ20cmの溝を設けていたものと考えられる。

遺物実測図－Ⅱ

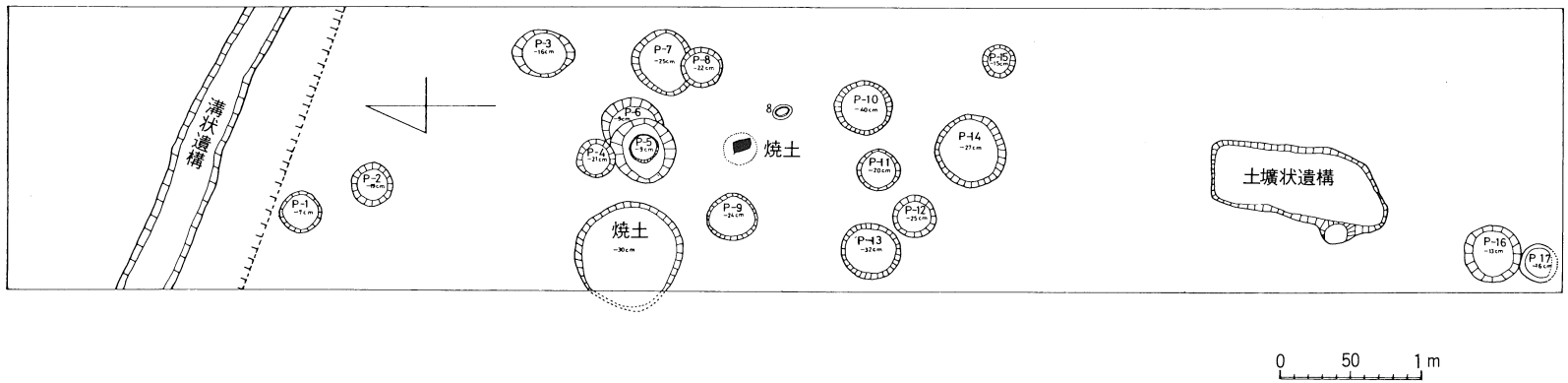


Ｂトレンチ出土物一覧表

遺物番号	器種	色調	胎土	焼成	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	備考(出土地点)
6	坏	灰白	粗砂点在	やや硬質	口径 12.2	やや上げ底気味 端面を丸くつまみあげる	マキアゲ 内外面ヨコナデ	Ｂトレンチ —50cm ピット 9
7	坏	灰白	中砂点在	やや硬質	口径 12.6	口縁上部外反気味	マキアゲ 内外面ヨコナデ	Ｂトレンチ ピット 5
8	坏	灰白	粗～中砂散在	硬質	口径 14.4	端面平坦な高台 （短かく鋭い）	マキアゲ 内外面ヨコナデ	Ｂトレンチ —50cm 焼土南西方 30cm
9	坏	灰白	中砂散在	硬質	高台径 14.3	ヨコナデによりやや丸味のある高台底	内面底部ヨコナデ 外面底部ヘラケズリ	Ｂトレンチ —38cm
10	壺の耳	淡青灰	中砂散在 緻密	硬質	幅 4.5		貼付ユビオサエ	Ｂトレンチ —55cm ピット 14
11	甕	明黄褐	粗～中砂散在	軟質	口径 23.3	「く」の字に外反する口頸部	外面頸部上半～肩部タテハケ 内面肩上半ヨコヘラケズリ	Ｂトレンチ —55cm ピット 14
12	蓋	青灰	中砂点在 緻密	硬質	口径 21.2	口縁端部内面に一条の凹面。厚めの天井部	内外面ヨコナデ （ロクロ使用）	Ｂトレンチ ピット 14
13	蓋	青灰	中砂点在 緻密	硬質	口径 13.6	やや凹面の否井部	内外面ヘラケズリ・ヨコナデ（回転台使用）	Ｂトレンチ ピット 14



第7図　西ノ岡遺跡Bトレンチ東壁地層断面



第8図　Bトレンチ平面実測図

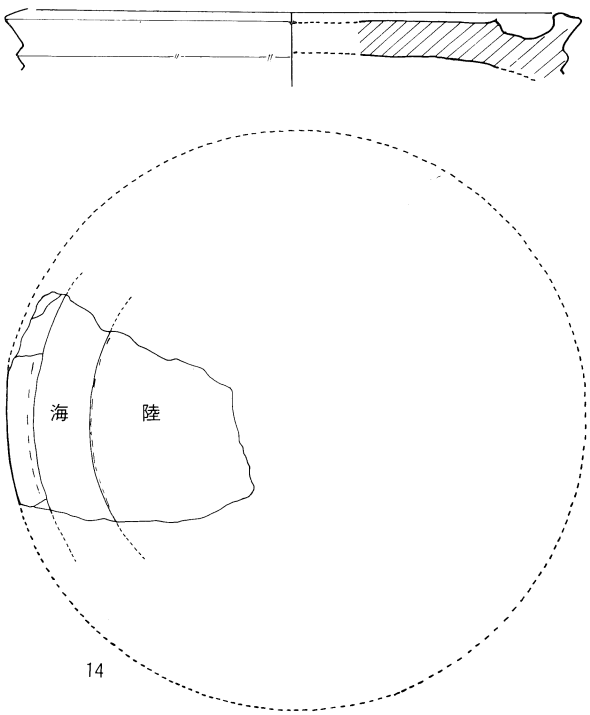
(Ⅱ－3) C_1 ・C_2 トレンチ

2×5mのトレンチを二本設定したが、北半部が急激に落ちる遷急地点に当たり、この落込みが人為的なものなのか自然地形なのか判断できない。しかし、その埋積状況により奈良時代以前には形成されていた落込みと考えられる。つまり地表下50cmで中世土鍋の破片を検出し、—80～120cmより中世の壺・甕（計測不能）の須恵製破片を検出している。従って図—11の地層断面からも判るように奈良時代から室町時代にかけて間歇的に埋積されていったものと考えられる。

また、C_2 トレンチ— 120cmより円面硯⒁を検出した。この円面硯は、硯面の16～20%を残欠するのみで台脚部を欠損しているが、口径15.4cmで径11.0cmの磨滑された陸を復元実測できる。陸の周囲に深さ 9.5mm、幅14.5mmの海がめぐり、陸と海の境界は高さ 0.5mmの稜線により明瞭に分けられる。そしてヨコナデによる弱い二条の凹線を上面にもち、幅 7.5mmの外縁が海を囲み、側面には突帯が施され、その直下の台脚部上端には透しを穿つ際に形成された幅 2.5cmに二ヶ所のヘラ痕を認め方形状の窓が穿たれていたものと判断される。

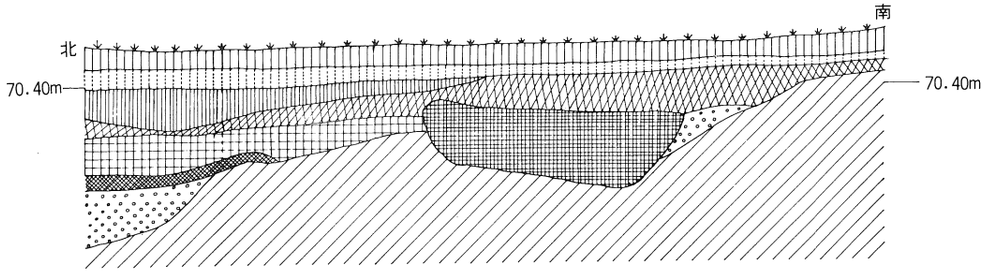
色調は表面が青灰色、断面に厚さ 2.0mmの淡赤褐色の部分がサンドウィッチ状に見られ、胎土は中砂が点在するが全体として緻密で硬質である。手法としては、内面はヨコナデ、外画はヘラケズリ後ヨコナデである。以上により焼成が完璧とは言えないまでも堅く焼きしまった作で、奈良時代盛期から後半期に推定して大過ないものと考える。

そして、この円面硯の出土状況より C_2 トレンチ南方（山寄り）に奈良時代のこの付近の主要建造物があったものと推定され、マサ土を搬出する土石流によりこの円面硯の破片がC_2 トレンチ北部の落込みへ埋没したものと考えられる。



0　5　10cm

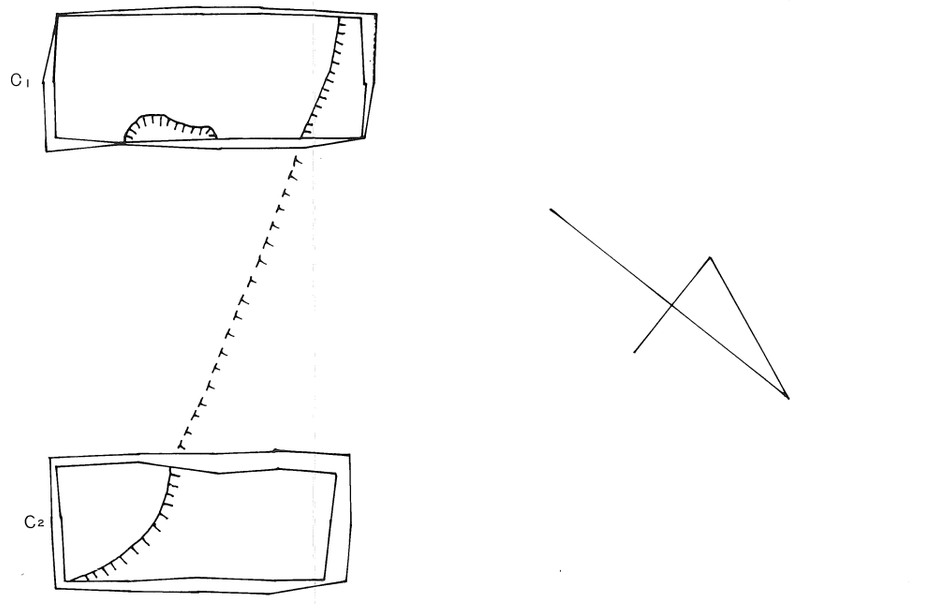
円面硯実測図—Ⅲ



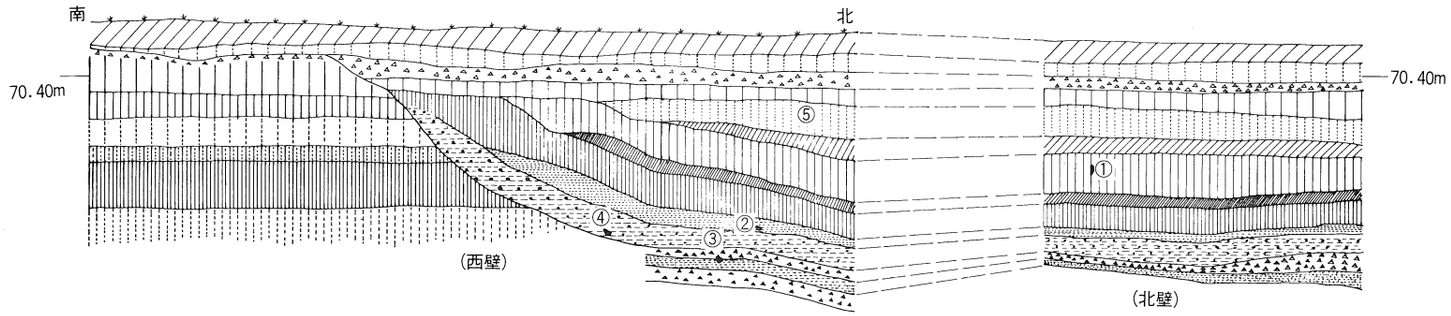
(東壁)

- 10Y R 5/4中小角～亜角礫散在淡黄褐色土層
- 10Y R 4/4～4/6中小角～亜角礫散在淡明黄褐色土層（集積層）
- 10Y R 5/6～4/6中小角～亜角礫散在淡黄褐色土層
- 7.5Y R 5/6～4/6中小角～亜角礫散在明褐色土層（集積層）
- 10Y R 4/4～3/4中小角～亜角礫散在淡黄褐色土層
- 7.5Y R 5/4～4/4中小角～亜角礫散在褐色土層
- 7.5Y R 5/4～5/6中小角～亜角礫散在淡褐色土層
- 5Y R 5/6～4/6中小角～亜角礫点在赤褐色土層
- 10Y R 6/6～5/6明黄褐色基盤礫岩

第10図　西ノ岡遺跡C₁トレンチ東壁地層断面図



第9図　C₁・C₂トレンチ平面図



- 10Y R 5/4中小角～亜角礫散在淡黄褐色土層
- 10Y R 4/3～4/4中小角～亜角礫散在淡暗褐色土層
- 10Y R 5/4～4/4中小角～亜角礫散在淡黄褐色土層
- 10Y R 4/3～3/3中小角～亜角礫散在暗褐色土層
- 2.5Y 6/3～6/4中小角～亜角礫点在淡黄色グライ化土層
- 10Y R 6/4～5/4中小角～亜角礫点在淡黄褐色斑文土層
- 2.5Y 6/4～6/6中小角～亜角礫点在灰黄色グライ化土層
- 10Y R 4/4～4/6中小角～亜角礫散在淡明黄褐色土層
- 10Y R 4/2～4/3中小角～亜角礫点在灰黄褐色土層
- 5Y R 5/4～5/6中小角～亜角礫点在暗赤褐色土層
- 5Y R 5/6～4/6中小角～亜角礫点在明赤褐色土層
- 10Y R 5/6～4/6中小角～亜角礫散在淡黄褐色土層
- 7.5Y R 5/6～4/6中小角～亜角礫散在明褐色土層
- 7.5Y R 5/4～4/4中小角～亜角礫散在褐色土層
- 10Y R 6/6～5/6明黄褐色基盤礫岩
- 10Y R 5/6～5/8暗黄褐色基盤礫岩（弱風化）
- 基盤岩（弱グライ化作用を受ける）
- 基盤岩
- 基盤岩（弱赤色風化を受ける）
- 基盤岩（弱グライ化作用を受ける）

① 須恵器片（外面 ハケメ、内面 タタキ、厚さ 6～9mm）6～7世紀
② 須恵器片（内・外面 ヨコナデ）7～8世紀
③ 壺口縁部・須恵器片（内・外面 ヨコナデ）7～8世紀
④ 円面硯・須恵製 8世紀
⑤ 中世土鍋 室町時代？

0　50　1m

第11図　西ノ岡遺跡C₂トレンチ西壁・北壁地層断面図

（Ⅱ－4）D_1 ・D_2 ・D_3 トレンチ

最初D_1 ・D_2 トレンチ（各２×15m）を設定したところ、D_2 トレンチでは出土量が少ないのに対して、D_1 トレンチではその南半部―30cm付近より古式土師器片が中小亜角礫～角礫淡黒褐色土層に混入して、一日平均約30片が出土した。

遺物が礫質土層より出土する為、土器片と礫との判別が取り上げる乞困難であり遺構の確認が出来ないままに漸深作業を行なった。その結果、地表下90～ 110cmで口縁部にクシガキ沈線を施した壺・甕類の破片を検出し、― 110cm前後でピット状遺構を検出すると同時に、第13図に見る様に略南北方向に置かれた７本の木炭と焼土を認めるに至った。

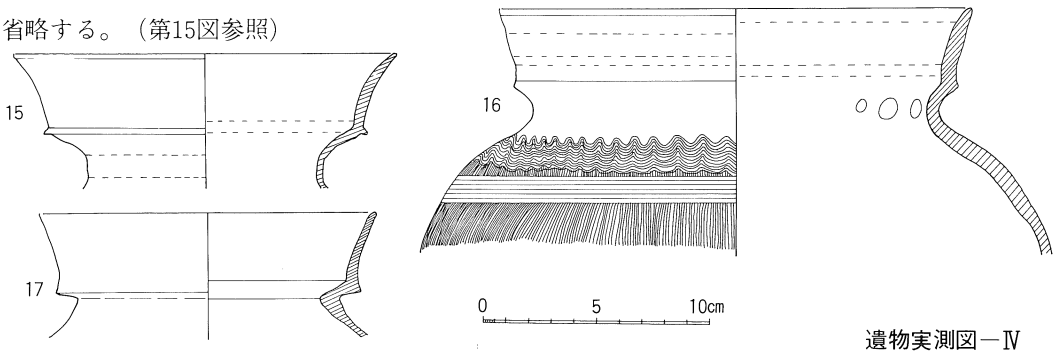
従って、D_1 トレンチの―90～ 110cm前後に見られる土層は優乱されていないと判断され、これに伴なう遺物として42・55・56を挙げる事ができる。42番の土器は一覧表では丸底型土器に分類しているが、正確には丸底気味土器と呼ぶべきもので底面にわずかな平担面を有する土器である。55番は比較的筒部の短かい鼓形器台であり、住居址の入口が南面していると仮定するならば、この位置には祭祀的な気配を感じる。そしてこの時期の日常的器台が56番で代表されるのではなかろうか。又、低脚坏に分類してはいるものの52・53・54番の土器は器台としての用途を十分に有するものであり、―90～ 110cmに見られる遺構面とどの様な関係を有するのか問題となる。

そこで、D_1 トレンチ南部での遺物の出土状況を層位的に見るならば、―90～ 110cm前後を弥生時代後期から末期と判断し、―40～50cmに一つの文化層を認め、この層準より古式土師器が相対的多量に出土すると判断できる。しかし全体として見るならば―80cmより浅いところは古墳時代前期以後に優乱されている可能性を有する事になり、―40～50cmの層位が四～五世紀を代表する層位である事を断定するのは早計であると言わざるを得ない。

ともあれ、D_1トレンチ南部―90～110cmで検出した住居址の規模を確認する為D_3 トレンチを設定したが、不明確ではあるが方形プランと推定出来る程度で全体を把握するには至らなかった。

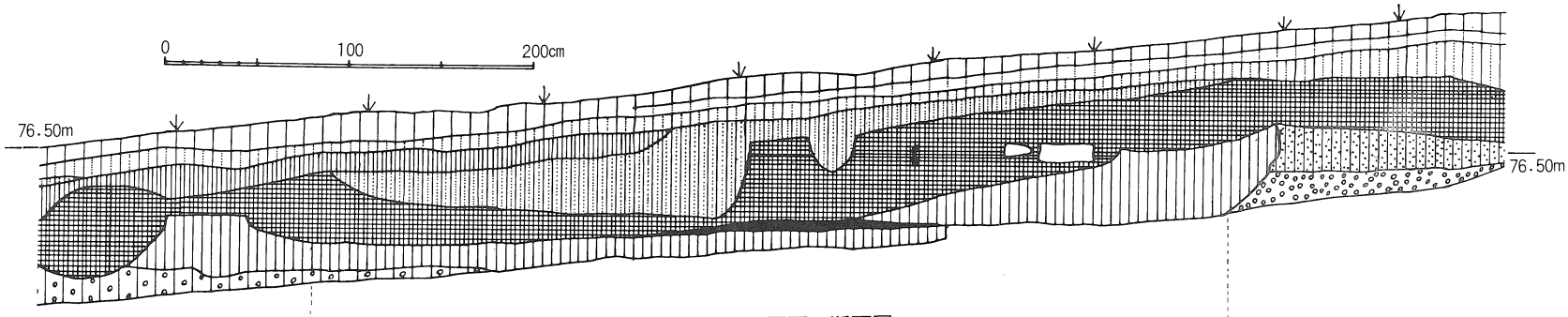
以上により、D_1 トレンチ南部―90～ 110cmに見られる住居址は排水溝を有する竪穴式住居で方形プランと推定され、これを弥生時代後期から古墳時代前期の土器片が礫層と共に被覆しているものと考えられる。

D_2 トレンチでは南端部で木棺墓の遺構を認めたが、伴出遺物はなく層相的に新期のものなので省略する。（第15図参照）

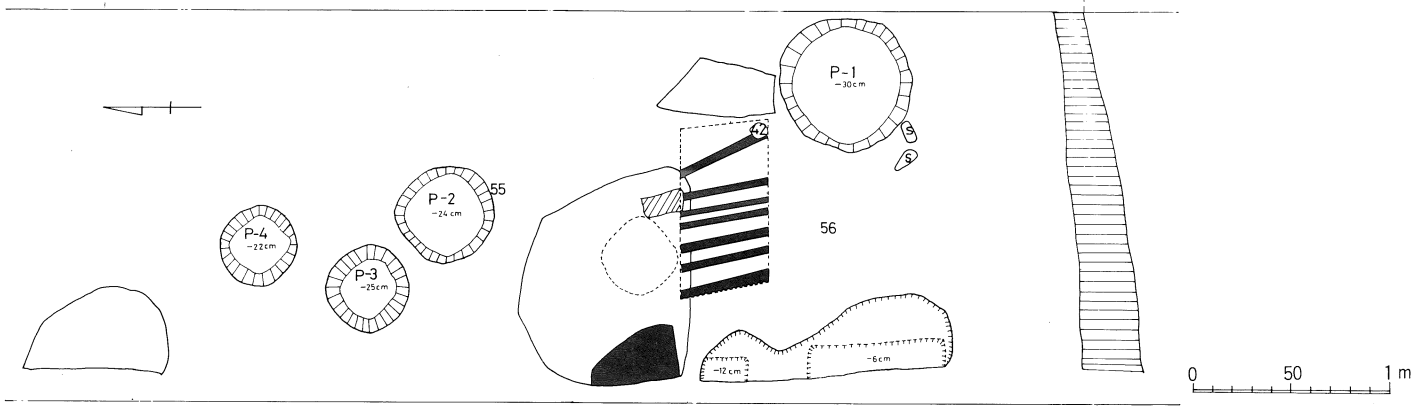


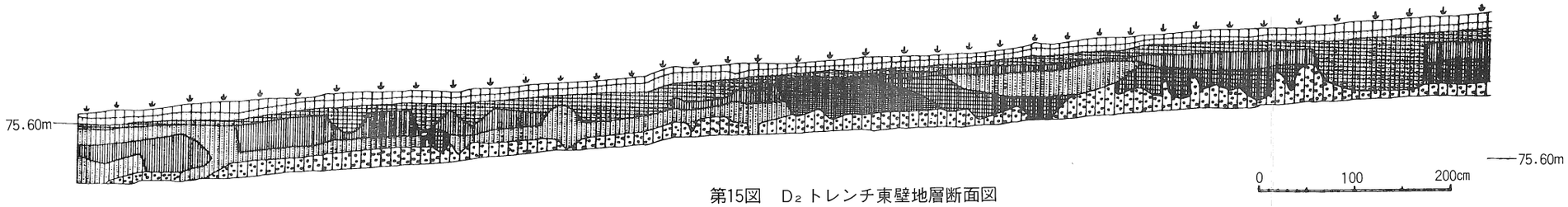
遺物実測図―Ⅳ

2.5Y 4/4中小角礫～亜角礫散在オリーブ褐色土層
2.5Y 4/3中小角礫～亜角礫散在オリーブ褐色土層（溶脱層）
2.5Y 4/6中小角礫～亜角礫散在オリーブ褐色土層（集積層）
10Y R 5/6～4/6中小角礫～亜角礫散在暗黄褐色土層
7.5Y R 5/6～5/8中小角礫～亜角礫散在暗黄褐色土層（弱赤色土化層）
10Y R 4/3～4/4中小角礫～亜角礫散在淡暗褐色土層
5Y R 6/8～5/8中小角礫散在明赤褐色土層（赤色土化）
7.5Y R 4/4～3/4中小角礫～亜角礫散在暗褐色土層
7.5Y R 4/4～4/6中小角礫～亜角礫散在褐色土層
10Y R 4/4～4/6中小角礫～亜角礫散在褐色土層（溶脱層）
10Y R 6/6～4/6中小角礫～亜角礫散在褐色土層（集積層）
10Y R 6/8～5/8中小角礫～亜角礫散在褐色土層（基盤礫岩表層）
住居址床面叩き土層（粘土の塊状混入・中小礫散在）

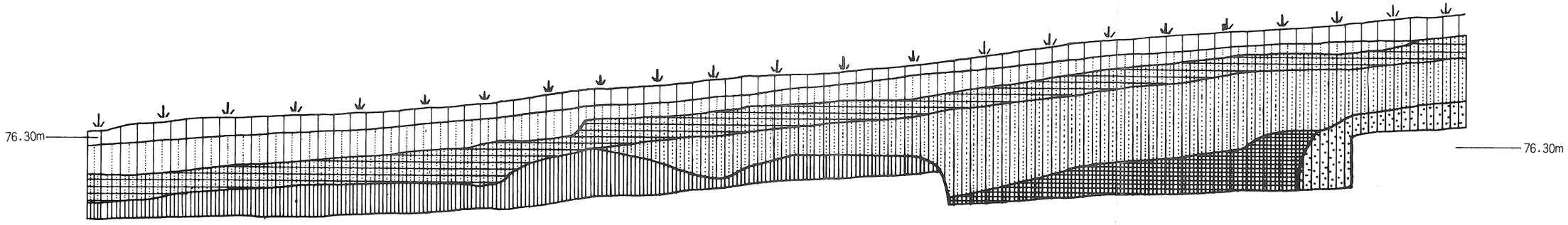


第13図　D₁ トレンチ平面・断面図

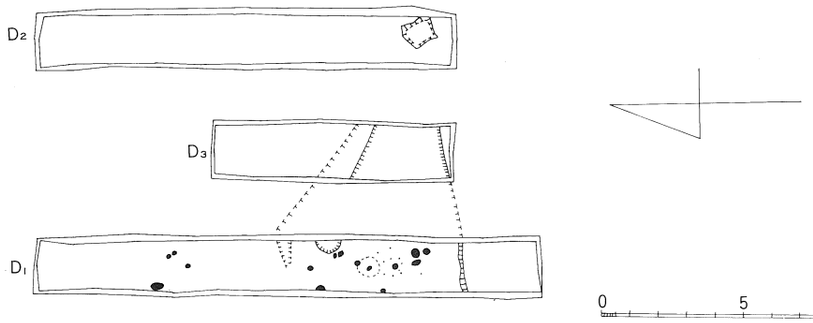




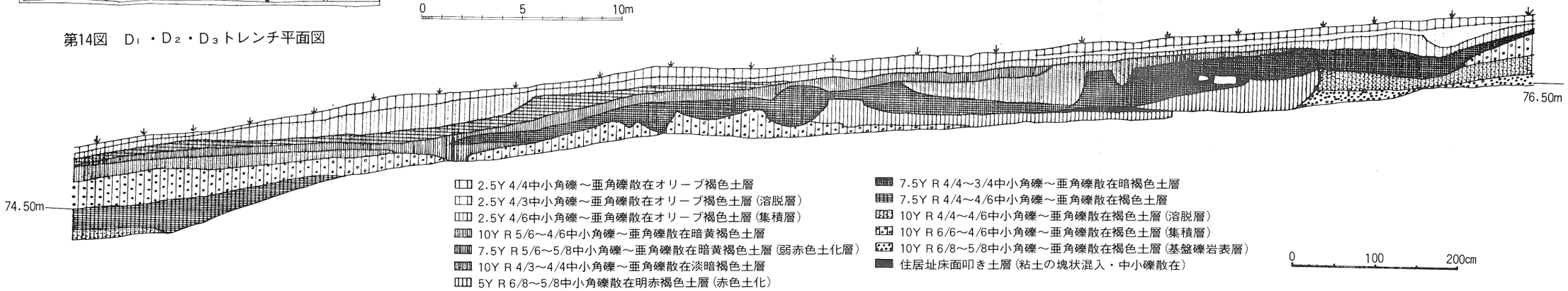
第15図　D₂トレンチ東壁地層断面図



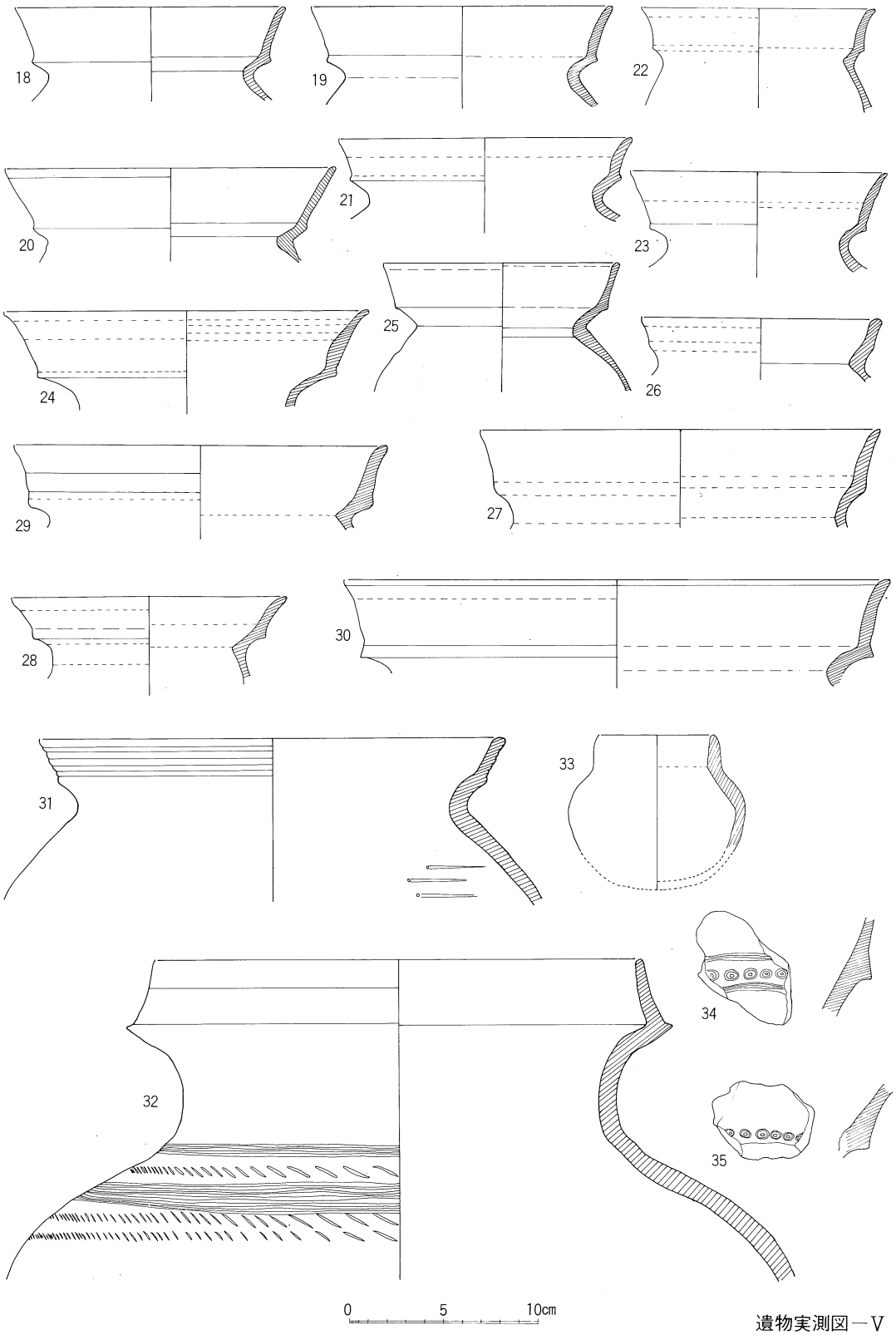
第16図　D₃トレンチ東壁地層断面図



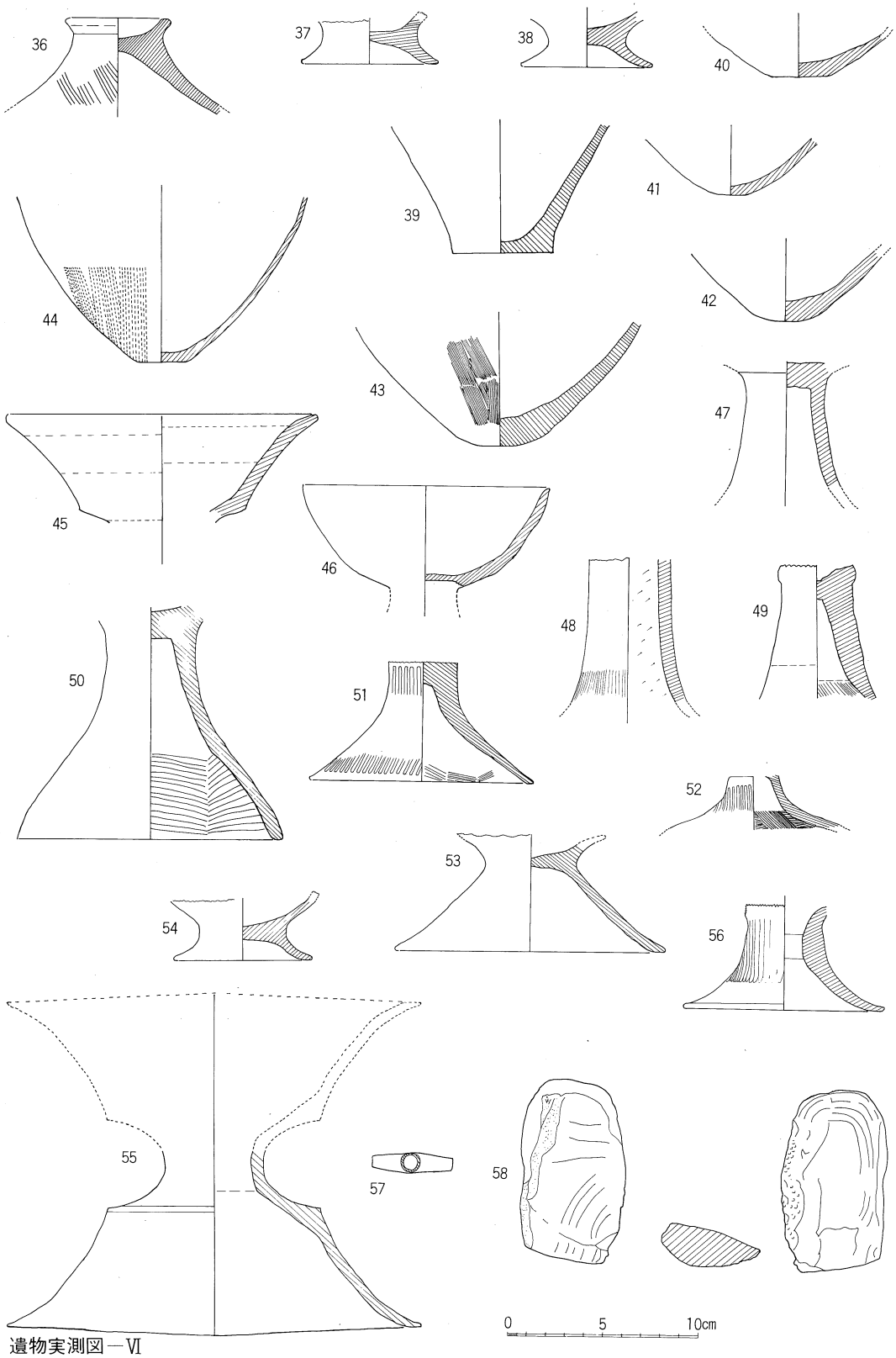
第14図　D₁・D₂・D₃トレンチ平面図



第17図　D₁トレンチ東壁地層断面図



遺物実測図－V


36
37
38
40
39
41
44
42
43
47
45
46
48
49
50
51
52
53
54
56
55
57
58
0
5
10cm

遺物実測図―Ⅵ

Dトレンチ出土物一覧表

遺物番号	器種	色調	胎土	焼成	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	備考（出土地点）
15	甕又壺	浅黄橙	中砂散在	やや硬質	口径 17.0	直線状の頸部、口縁下部に稜をもつ複合口縁	外面ヨコナデ 内面口頸部ヨコナデ	D3 トレンチ —60cm 外面にスス沈着
16	甕又壺	黄褐	中砂散在 緻密	やや硬質	口径 21.0	緩外反口縁。下部に稜複合口縁	口縁下に2条の凹面。肩上部に12条より成る波状文	D1 トレンチ —85cm 外面スス沈着
17	甕又壺	浅黄橙	中砂散在	やや軟質	口径 15.0	複合口縁。緩外反口縁。口縁下部に稜をもつ	外面ヨコナデ 内面肩部ヘラケズリ	D1 トレンチ南部
18	甕又壺	にぶい黄褐	細砂散在 均質	やや軟質	口径 14.4	複合口縁。外傾する口縁部。 口縁下部に稜をもつ。	口縁下に2条の凹面 外面ヨコナデ。 内面口縁ヨコナデ	D1 トレンチ南部
19	甕又壺	にぶい黄褐	中砂散在	やや軟質	口径 16.0	複合口縁。外傾する口縁部。 口縁下部に稜をもつ。	内外面ヨコナデ	D1 トレンチ南部
20	甕又壺	淡黄	中砂点在 細砂散在	やや軟質	口径 17.6	複合口縁。外傾する口縁部。 口縁下部に稜をもつ。	口縁端部をややツマミアゲル。 内外面ヨコナデ。	D1 トレンチ南部
21	甕又壺	淡黄	中砂散在	やや軟質	口径 15.6	複合口縁。緩外反口縁部。口縁下部に 口縁下部に稜をもつ。	内外面ヨコナデ 口縁端面を丸く仕上げる。	D1 トレンチ —40cm
22	甕又壺	にぶい黄橙	粗砂散在 （石英粒）	やや軟質	口径 12.4	複合口縁。緩外反口縁部。口縁下部に弱い稜をもつ。	内外面ヨコナデ	D3 トレンチ —50cm
23	甕又壺	にぶい黄橙	中砂散在 均質	やや硬質	口径 14.6	複合口縁。外傾する口縁部。口縁下部に鋭い稜をもつ。	内外面ヨコナデ	D1 トレンチ南部
24	甕又壺	にぶい黄橙	小礫点在 中砂散在	やや硬質	口径 19.4	複合口縁。大きく外反する口縁部。口縁下部に鋭い稜をもつ。	内外面ヨコナデ	D3 トレンチ —80cm 外面にスス沈着
25	甕又壺	にぶい黄橙	口砂散在 小礫点在	やや軟質	口径 13.6	弱い複合口縁。緩外反口縁部。口縁下部に弱い稜をもつ。	内外面ヨコナデ 内面肩ヘラケズリ	D3 トレンチ —60～80cm 外面にスス沈着
26	甕又壺	浅黄橙	緻密	やや硬質	口径 12.8	厚めの口縁部 丸みのある口縁端面	内外面ヨコナデ	D1 トレンチ南部
27	甕又壺	にぶい黄橙	小礫点在 中砂散在	やや軟質	口径 21.2	弱い複合口縁。外傾する口縁部。口縁下部に鈍い稜をもつ。	内外面ヨコナデ	D1 トレンチ 外面頸部に赤色顔料残存
28	甕又壺	にぶい橙	小礫点在 粗砂散在	やや硬質	口径 14.6	「く」の字に外反する口頸部。 口縁下部に稜をもつ	内外面ヨコナデ	D3 トレンチ —80cm 外面にスス沈着
29	甕又壺	にぶい橙	粗砂点在 緻密	やや硬質	口径 19.8	「く」の字の頸部 口縁部に2条の弱い凹面	口縁下部ツマミ出し凸帯をつくる	D1 トレンチ —80cm 外面口縁部スス沈着
30	甕又壺	外面は黒 内面は淡黄 淡黄	中砂点在 緻密	やや硬質	口径 29.0	複合口縁。口縁下部に鋭い稜をもつ。	口縁端部をややツマミアゲル 内外面ヨコナデ	D1 トレンチ —75cm
31	甕又壺	にぶい橙	小礫点在 粗砂散在	やや硬質	口径 24.8	「く」字に外反する口頸部 口縁部に6条の沈線	外面ヨコナデ 内面口縁部荒らいヘラミガキ 内面肩部ヘラケズリ	D1 トレンチ南部 —40～75cm

遺物番号	器種	色調	胎土	焼成	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	備考（出土地点）
32	甕又壺	淡黄	均質細粒	やや硬質	口径 29.0	複合口縁。内傾する口縁部。口縁下部に鋭い稜をもつ。	外面ヨコハケ 内面肩ヘラケズリ 内面口頸部ヨコハケ	D1 トレンチ南部 —60cm
33	小壺	黄橙	中砂点在 緻密	やや軟質	口径 6.2	直立気味の短い口縁部 厚めの口頸部	外面・内面口縁部ヨコナデ 内面肩ヘラケズリ	D3 トレンチ中央部 —50～60cm
34	壺	橙	粗砂点在	やや軟質	不明	緩外反の口縁部 口縁下部に稜	内面ヘラミガキ 外面三重スタンプ文 4本のクシガキ沈線	D3 トレンチ —80cm
35	壺	浅黄	粗砂散在	やや硬質	不明	外反・口縁部 口縁下部に稜	内面不明 外面ヨコナデ 二重スタンプ文 （沈線なし）	D1 トレンチ
36	蓋	黄橙	粗砂散在	やや軟質	つまみ径 5.6	外反して大きく開く口縁部	外面ハケメ、ヨコナデ 内面ヨコナデ？	D1 トレンチ —75cm 外面に赤色顔料塗付
37	甕・壺の底	浅黄橙	中砂散在	やや硬質	底径 7.2	不明	外面ヨコナデ 内面ヘラケズリ	D1 トレンチ南部 外面赤色顔料塗付
38	甕・壺の底	淡橙	粗砂点在 緻密	硬質	底径 6.9	不明	外面ヨコナデ 内面底部指圧	D1 トレンチ
39	平底型土器	外面 面にぶい橙 内面 淡黒褐	均質細粒 緻密	硬質	底径 5.2	一端立上がり緩外反	外面ナデ仕上げ？	D1 トレンチ —40cm
40	平底型土器	外面浅黄 内面淡黄	点礫点在 中砂散在	やや硬質	底径 3.0	上げ底気味 緩やかに立上がる	外面ナデ 内面ヘラケズリ	D3 トレンチ —30cm
41	丸底型土器	外面 にぶい黄褐 内面 にぶい黄	均質 緻密	やや硬質	底径 1.3	丸底気味 緩やかに内弯立上がる	外面ナデ 内面タテハケ数条	D3 トレンチ —60cm 内面黒色々素沈着
42	丸底型土器	外面橙 内面浅黄	粗砂散在	軟質	底径 1.0	丸底気味 内弯立上がる	外面ナデ 内面ヘラケズリ	D1 トレンチ — 100cm床面 外面スス沈着
43	丸底型土器	外面 にぶい橙 内面浅黄	中砂散在	やや硬質	底径 2.0	丸底気味 内弯立上がる	外面タテハケメ 内面ヘラケズリ	D3 トレンチ —60cm北西部 外面スス沈着
44	丸底型土器	外面 にぶい橙 内面 浅黄橙	中砂散在 緻密	やや軟質	底型 2.6	丸底気味薄い 内弯立上がる	外面タテハケメ 内面タテナデ	D3 トレンチ —60cm
45	高坏坏部	橙	粗砂点在	やや軟質	口径 16.4	大きく外反する口縁部 口縁下部に稜	不明	D1 トレンチ —90cm 外面赤色顔料塗付
46	高坏坏部	黄褐	細砂点在 緻密	やや硬質	口径 12.6	稜をもたず内弯する坏部 （脚付椀？）	外面下部ヘラケズリ 上部ヨコナデ 内面ヨコナデ	D1 トレンチ
47	高坏脚部	橙	中砂点在 細砂散在	やや軟質	不明	脚天井部が広い 長めの脚	内外面タテナデ	D3 トレンチ —80cm
48	高坏脚部	黄褐	中砂点在 細砂散在	やや軟質	不明	脚天井部が広い 脚下半部が開く	外面脚下半タテハケ 内面ヨコ・ナナメケズリ	

遺物番号	器種	色調	胎土	焼成	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	備考（出土地点）
49	高坏 脚部	にぶい 黄橙	緻密	やや 硬質	不明	脚下半部が大きく開く	外面不明 内面下半部ナナメハケ	D1 トレンチ南部
50	高坏 脚部	黄褐	粗砂散在	やや 硬質	脚端径 14.0	脚下部が緩内弯する	外面タテナデ 内面粗いヨコハケ	D3 トレンチ —40cm 外面赤色顔料塗付
51	高坏 脚部	浅黄	中砂点在 緻密	やや 硬質	脚端径 11.8	短かめの胴 45° に開く脚裾	外面タテヘラミガキ 内面ヨコハケ 後ヨコナデ	D3 トレンチ —60cm
52	低脚 坏脚	黄橙	中砂点在 緻密	やや 軟質	不明	短かい胴 大きく開いた脚裾	外面タテヘラミガキ 内面断続的ヨコハケ	D1 トレンチ
53	低脚坏	オリーブ 黄	小礫点在 中砂散在	やや 軟質	脚端径 14.2	小さな坏部 45° に開く脚部	不明 （内外面ヨコナデ？）	D1 トレンチ —65cm
54	低脚坏	淡明黄	均質 細砂散在	軟質	脚端径 7.2	短かく外反気味の脚部 内弯気味立上がる坏部	内外面ヨコナデ	D3 トレンチ —60cm
55	鼓型 器台	黄橙	小礫点在 中砂散在	軟質	口径 21.8	短かめの筒部 大きく外反する口縁部 口縁下部に稜	外面ヨコナデ 内面ヘラケズリ 後ヨコナデ	D1 トレンチ —90cm
56	器台	褐灰	中砂点在 緻密	やや 硬質	口径 10.6	短かめの胴 45° 外反の脚下部	外面タテヘラミガキ 内面ヘラケズリ 後ヨコナデ	D1 トレンチ
57	土錐	浅黄	細砂点在 緻密	やや 硬質	長さ 4.25 口径 1.05	紡錐形、全体的に薄めの土錐	不明	D1 トレンチ排土
58	石斧	灰 オリーブ	玄武岩		長さ 9.5 幅 5.5			D2 トレンチ南西部 —50cm

（Ⅱ－5）E_1 ・E_2 トレンチ

E_1 ・E_2 トレンチを設定して、C_2 トレンチで検出した円面硯に関連する遺構の検出を試みた。しかし両トレンチ共に—20cm前後で基盤岩（鳥取層群下部類層）に達し、明瞭な遺構・遺物共に検出できなかった。

E_2 トレンチ清掃中、この北壁東端部に円磨された巨礫を認め、この巨礫の性格を確認する為に拡幅作業を行なった。その結果、奥壁に三郡変成岩を使い、側壁その他に円磨した川原石（安山岩）を配した約２ｍ四方の石組を検出した。

これを横穴式石室であると断定し、仮称、西ノ岡古墳とした。この古墳についての詳述は項を改めて行なう。

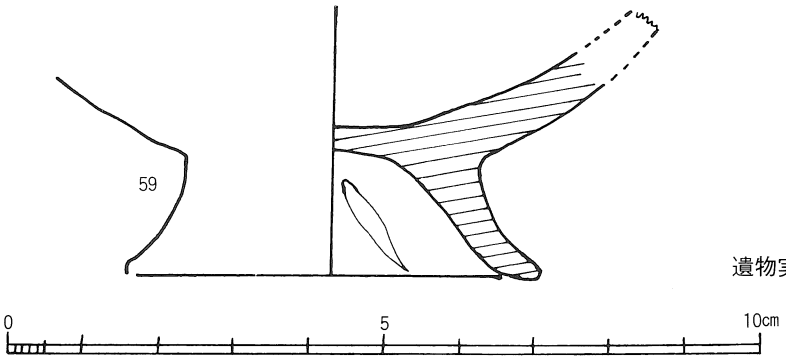
（Ⅱ－6）Ｆトレンチ

本トレンチ（２×10ｍ）は、今回の試掘調査の中で最も高度のある所に位置しており、地形的に言えば扇状地の扇央部に相当すると考えられる。しかし、この扇状地は沖積世に形成されたものなので、遺物・遺構の存在する可能性は十分にあり、逆に遺物・遺構が検出されなかったとしてもそれを確認する事には価値がある。

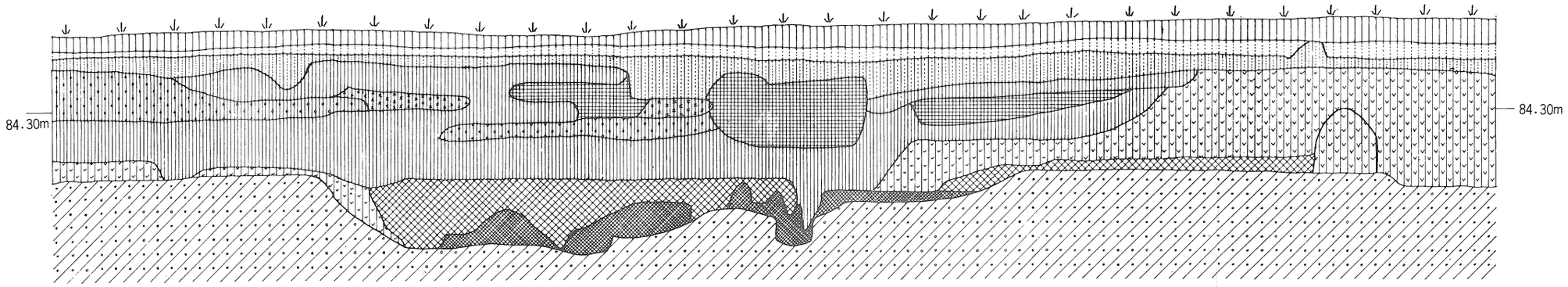
本トレンチ西隅—50cmより胴部直径約25cmの土師器（甕？）とピット状遺構を認め、中央部で幅約３ｍの黒褐色の落込みを認めた。この黒褐色礫層中に土師器片の混入が見られ、地表下80cmではスタンプ文（厚さ２mm）の暗褐色を呈する土師片も確認した。この他に、トロ箱一杯分の土器片を検出したが、計測可能なものは見当らない。

その中で59番の遺物によりＦトレンチを代表させたい。この遺物は低脚坏もしくは器台に分類されるもので、淡黄色を呈し、胎土には中粒砂が点在しやや軟質である。形態上の特徴として低く小さな脚部と緩やかに外反する底体部。手法上の特徴として外面ヨコナデ・脚内面不規則なヘラケズリを認める。この59番はＦトレンチ中央部—80cmで検出したが、時期的には弥生時代末期から古墳時代前期のものと推定され、D_1 トレンチの遺構被覆層と同時期のものと推定される。

この結果、明瞭に遺構を把握する事はできないが、隣接して存在する福井古墳とは直接的な関係をもたない、何らかの遺構がある事は確認でき、同時に西ノ岡遺跡の位置する沖積扇状地の扇央部にも遺構が分布している可能性を指摘できる。



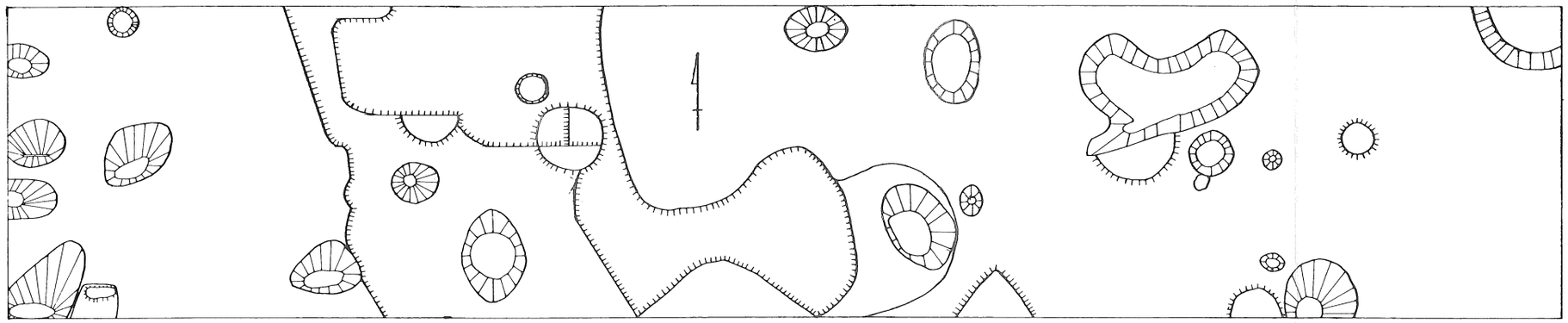
遺物実測図－Ⅶ



10Y R 5/4中小角礫～亜角礫散在淡黄褐色土層
2.5Y R 5/3中小角礫～亜角礫散在灰黄褐色土層
10Y R 4/2～4/3中小角礫～亜角礫散在暗黄褐色土層
10Y R 4/4～4/6中小角礫～亜角礫散在淡明黄褐色土層
10Y R 4/4～4/6中小角礫～亜角礫散在明黄褐色土層
10Y R 4/4～3/4中小角礫～亜角礫散在暗褐色土層
10Y R 5/6小亜角～中角礫散在明淡黄褐色土層
10Y R 3/3～3/4小亜角～中角礫散在暗褐色土層
10Y R 4/4～3/4小亜角～中角礫散在淡暗褐色土層
7.5Y R 4/4～3/4小亜角～中角礫散在富暗褐色土層
7.5Y R 4/6弱風化礫散在粘質暗赤褐色土層
10Y R 6/6～4/6ローム質小亜角～中角礫黄褐色層

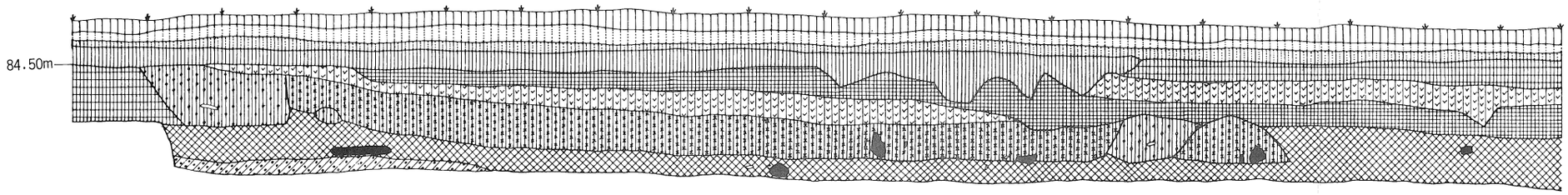
0 50 1 2m

第18図　Ｆトレンチ北壁地層断面図



0 50 1m

第19図　Ｆトレンチ平面図



10Y R 5/4中小角礫～亜角礫散在淡黄褐色土層
2.5Y 5/3中小角礫～亜角礫散在灰黄褐色土層
10Y R 4/2～4/3中小角礫～亜角礫散在暗黄褐色土層
10Y R 4/4～4/6中小角礫～亜角礫散在淡明黄褐色土層
10Y R 4/4～4/6中小角礫～亜角礫散在明黄褐色土層
10Y R 4/4～3/4中小角礫～亜角礫散在暗褐色土層
10Y R 5/6小亜角礫～中角礫散在明淡黄褐色土層
10Y R 3/3～3/4小亜角～中角礫散在暗褐色土層
10Y R 4/4～3/4小亜角～中角礫散在暗褐色土層
7.5Y R 4/4～3/4小亜角～中角礫散在淡暗褐色土層
10Y R 6/6～4/6ローム質小亜角～中角礫黄褐色層

0 50 1 2m

第20図　Ｆトレンチ南壁地層断面図

（Ⅱ－7）西ノ岡古墳

西ノ岡古墳は沖積扇状地の扇端部に位置しているかに見えたが、E₁・E₂トレンチの所でも述べたように、地表下20cm前後で基盤岩の鳥取層群下部層に達してしまう。

E₂ トレンチ東壁で土層断面を見ると、表土層は中粒構造をもつ10×10×5mmの中小角礫を散在させる、色調 2.5Y 5/3～5/4の黄褐色土層で層厚10cmを測る。その下位層は、層相は同質であるが層厚15cm、色調 7.5YR 4/6の明褐色土層へ漸移し、下位の層厚15cm、7.5YR 3/4の色調をもつ中小角礫～亜角礫点在暗褐色土層へと変化して行く。そして10YR 6/8～5/8の明黄褐色を呈する新第三系中新統の基盤礫岩に達する。

従って、西ノ岡古墳は下位の中位段丘（いわゆる3万年段丘）との比高約15m を有する丘陵の末端部・高度73.5m 前後の所に位置している。そして、この古墳の南東約60m 、高度81m には福井古墳があり、両古墳ともに北方に八東川の形成した平野を一望できる所に立地している。

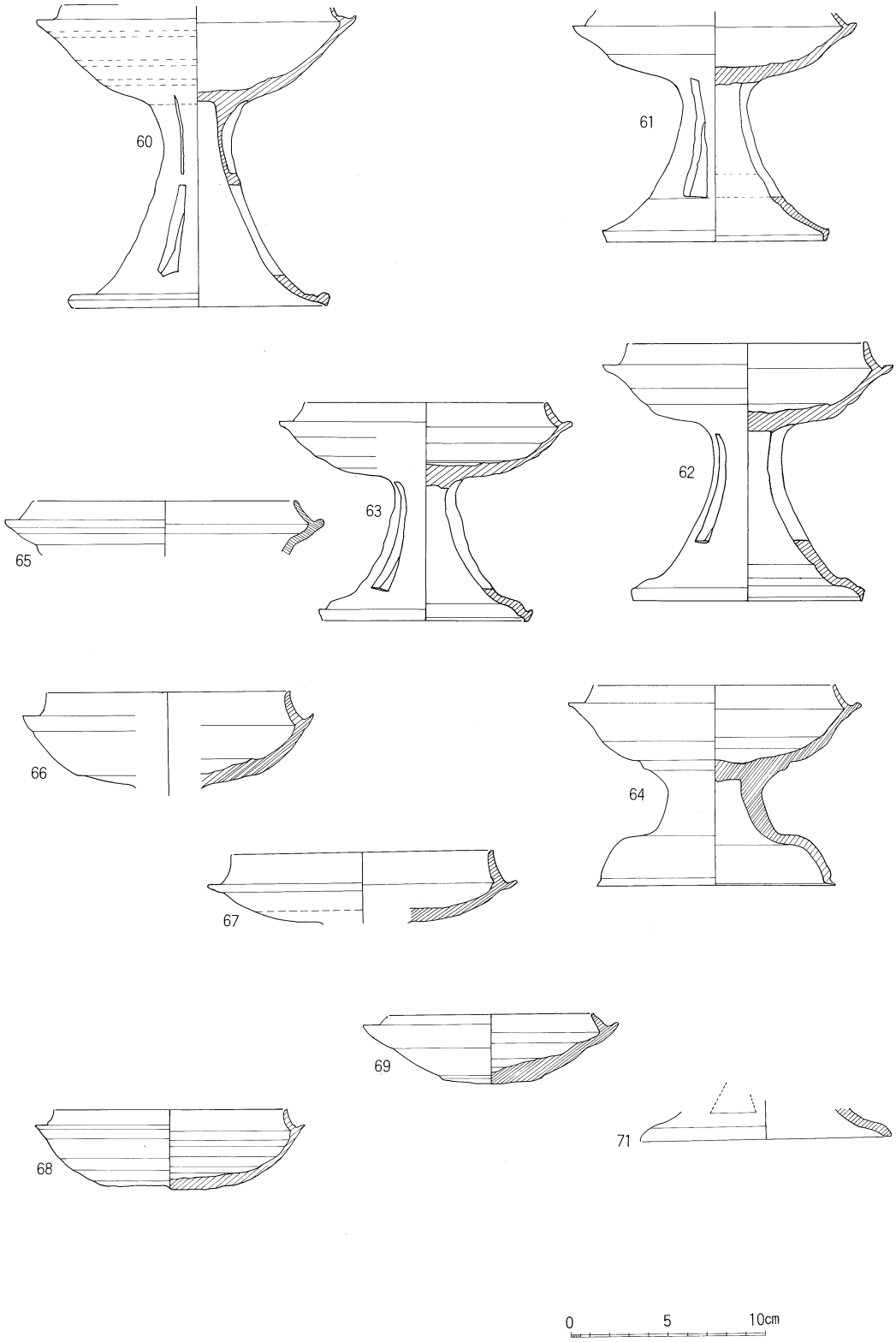
西ノ岡古墳の築造方法を推定すると、Dトレンチでの沖積層の層厚が約 110cmである事とC・Dトレンチでの層相・土壌匍行等を考慮すると、沖積層の層厚は西ノ岡古墳地点で約50cmと推定され、基盤礫岩を30～40cm掘り込んで築造したものと判断する。

この古墳は、両袖の横穴式石室で入口は閉塞され、玄室内の高さは60cm以上（奥壁右隅の転落石を考慮）あったものと推定され、第21図から幅約 190cm、長さ約 200cmの玄室を実測出来る。

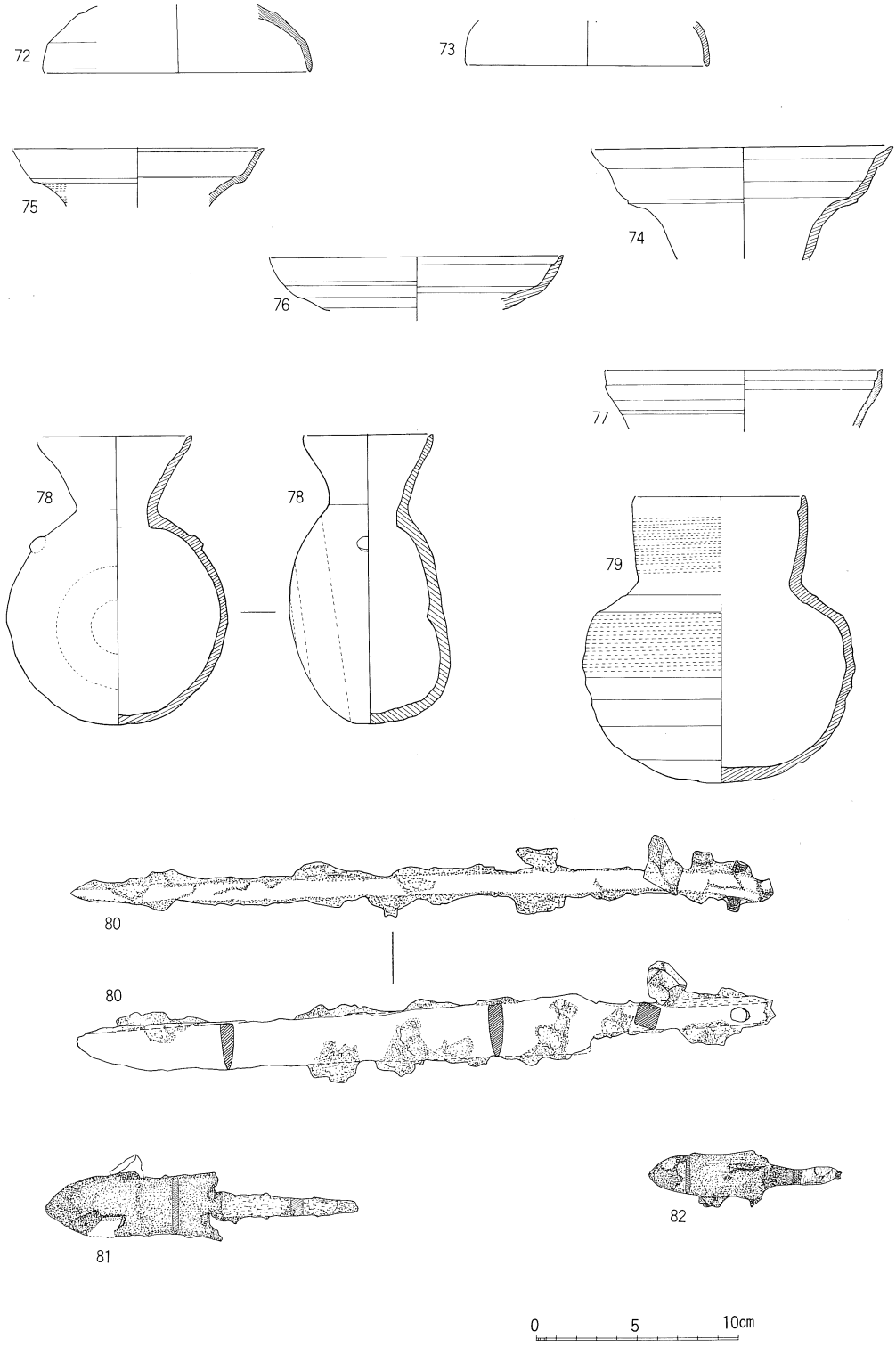
又、石室に使用している石は、奥壁のみに横幅 168cm、厚さ約20cmの三郡変成岩の切割石を使い、奥壁幅に長さが足りなかった為か、この切割石の右側に35×38×20cmの川原石（安山岩）を配して、この2個の石より奥壁が構成されている。右側壁は97×52×32cmの石を最大とする計3個の川原石（安山岩）を配して側壁を構成し、この巨石の根石として安山岩の扁平な川原石を使用している。この巨石の上位には根石状の石は見られず、又巨石の間隙を埋める石も検出してないので断言する事はできないが、第1図に見る右側壁背後の巨石の痕跡は、側壁を二段に重ねたものと判断され残存している側壁の掘り方とは考えられない。左側壁も右側壁と同様の作り方と判断され、残存している石は75×36×25cmの安山岩質川原石であるが、2ヶ所に巨石底面の根跡を認める。

入口付近の袖部を構成する石は、奥壁に対して直交する様に配置され、羨道部も含めて6個の巨石跡と考えられ、左袖の位置は外方の根石付近が妥当と判断する。出土物は破片等も含めて、高坏10・坏2・蓋2・甕2・壺1・提瓶1・直刀1・鉄鏃3・刀子2・鉋1を検出した。

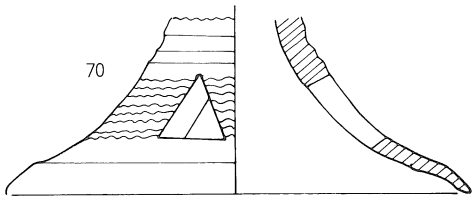
これら出土物とその出土状況より古墳の造営時期を6世紀全搬から7世紀初頭と推定し、第1図（巻頭）に見る如く追葬の痕跡も認められる。伴出物を見ると、第21図8番で出土した高坏5個より大きく分けて三期を分類する。古い方から64番の短脚無透、63・62・61番の短脚・長脚三方一段透し、そして60番の長脚三方二段透の高坏である。この5個の高坏に加えて65番66・67番の高坏を考慮すると、口縁部と脚端部に決定的な相違が認められ、少なくとも3回の追葬がなされたものと考える。

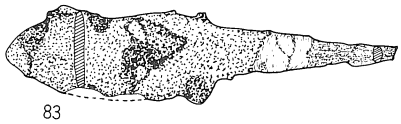


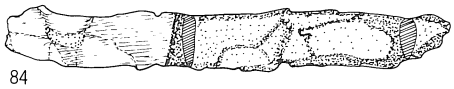
遺物実測図－Ⅷ

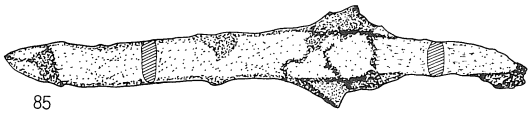


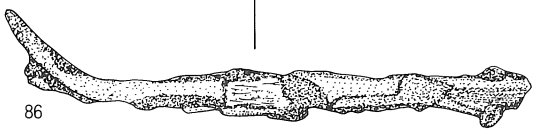
遺物実測図－Ⅸ

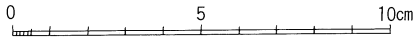












遺物実測図－X

西ノ岡古墳出土物一覧表

遺物番号	器種	色調	胎土	焼成	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	備考（出土地点）
60	高坏	褐灰	粗砂点在 緻密	硬質 不安全	口径 13.9	二段階に立上がる 脚端部に３条の凹面	マキアゲ 内外面ヨコナデ	⑧－a
61	高坏	青灰	細砂散在 緻密	硬質 良好	口径 12.1	緩内弯で立上がる 脚端部に稜 脚端側面に凹面	マキアゲ 内外面ヨコナデ	⑧－b 坏底部以下に赤色顔料
62	高坏	暗青灰	中砂点在 緻密	硬質 良好	口径 12.4	内傾気味で立上がる 脚端部に凸面と１条の沈線	マキアゲ 内外面ヨコナデ	⑧－c 坏底体部以下に赤色顔料
63	高坏	暗青灰	中砂点在 緻密	硬質 良好	口径 12.6	緩内弯で立上がる 脚端部に凸面と１条の沈線	マキアゲ 内外面ヨコナデ	⑧－d 坏底体部以下に赤色顔料
64	高坏	暗青灰	中砂点在 緻密	硬質 良好	口径 15.2	短かく太い脚上半部 脚下半部は大きく内弯し、端部に１条の凹面 端底面は平面	マキアゲ 内外面ヨコナデ	⑧－e
65	高坏 坏部	青灰	細砂散在 緻密	硬質 不安全	口径 13.6	内傾気味で立上がる	マキアゲ？ 内外面ヨコナデ	④、外面全体に赤色顔料塗付
66	高坏 坏部	青灰	中砂点在 緻密	硬質 良好	口径 12.6	外反し立上がる 鋭い受部端面	マキアゲ、立上がりヨコナデ。 底体部ヘラケズリ、後ヨコナデ。	③、④
67	高坏 坏部	淡青灰	中砂点在 緻密	硬質 良好	口径 13.5	外反気味立上がる	マキアゲ、立上がりヨコナデ。 底体部ヘラケズリ 後ヨコナデ	⑳
68	坏	暗青灰	均質 緻密	硬質 完全	口径 12.0	２段階に立上がる 薄く狭い受部	マキアゲ、内面ヨコナデ。底体部・下部外面ヘラケズリ。	羨道部出土
69	坏	淡青灰	小礫点在	硬質 良好	口径 10.6	短かく内傾する立上がり。 受部直下に凹面がない	マキアゲ、内面ヨコナデ。底体部・下部外面ハケメ調整	⑮
70	高坏 脚部	暗青灰	中砂散在 緻密	硬質 良好	口径 12.2	脚端部内弯。三角形の窓。脚中部に２条の凹	内外面ヨコナデ 脚中部に波状文	③
71	高坏 脚部	外面青黒 内面青灰	中砂点在 緻密	硬質 完全	口径 13.0	脚端部内弯 脚下部に三角形（？）の窓	内外面ヨコナデ	㉑
72	坏蓋	青灰	小礫点在 緻密	硬質 良好	口径 13.4	口縁部に凹面	内外面ヨコナデ 口縁端部を丸くおさえる	㉑
73	坏蓋	青灰	細砂散在 緻密	硬質 良好	口径 12.1	口縁部に凹面	内外面ヨコナデ 口縁端部を丸くおさえる	⑳
74	瓶	青灰	粗砂点在 緻密	硬質 良好	口径 15.1	外反する口縁下部 口縁下部に１条の稜	内外面ヨコナデ 口縁端部を指オサエ	③
75	瓶	暗赤褐	均質 緻密	硬質 良好	口径 12.5	曲折し立上がる口縁部 内面口縁端部と外面口縁下部に１条の沈線	内面ヨコナデ 外面頸部ヨコハケ 外面口縁上部ヨコナデ	③
76	高坏？	紫青灰 緻密	粗砂散在 良密	硬質 良好	口径 14.6	口縁端部をツマミアげて内面を薄くする	内面ヨコナデ 外面底体部ヨコハケ	⑪ 外面に自然釉付着

遺物番号	器種	色調	胎土	焼成	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	備考（出土地点）
77	不明	暗青灰	中砂点在 緻密	硬質 良好	口径 13.8	内面口縁端部に凸線 薄めの口縁端部	内外面ヨコナデ	②
78	提瓶	暗青灰	粗破散在	硬質 良好	口径 7.7	肩部にボタン状の耳を貼付。 体部側面に貼合せの為の凹面残す	体部マキアゲ、ハケメ 口縁部内外面ヨコナデ	⑧-f
79	壺又瓶	暗オリーブ灰	小礫点在	硬質 良好	口径 8.6	直立内弯気味の口頸部 口縁端部内面に段差あり	内面ヨコナデ、マキアゲ。 胴上半部以上外面にヨコハケ。 胴下半部以下外面ヘラケズリ	⑤

〔石器〕

８０：直刀（出土地点⑰）
全長 35.2cm　刃長 25.0　茎長 10.2　元幅 2.5　先幅 1.6　元重ね 0.9　先重ね 0.5　反り－なし　茎反り－なし
目釘孔径 0.3　目釘長 2.3
強弱二種類のＸ線写真により実測値を記したが、造込が平造で角棟、両区の直刀と判断出来るが、強Ｘ線写真よりハコボレの痕跡があり、宝物的なものでなくて、生前に使用されたものと考えられる。

８１：鉄鏃（出土地点⑦）
直茎二翼（逆刺）鏃で、現存長 15.5cm（含茎 7.3cm）。身幅 2.9　身厚 0.3を測る
鏃身の断面は扁平な楕円形をなし、茎部分は長方形の断面をなす。

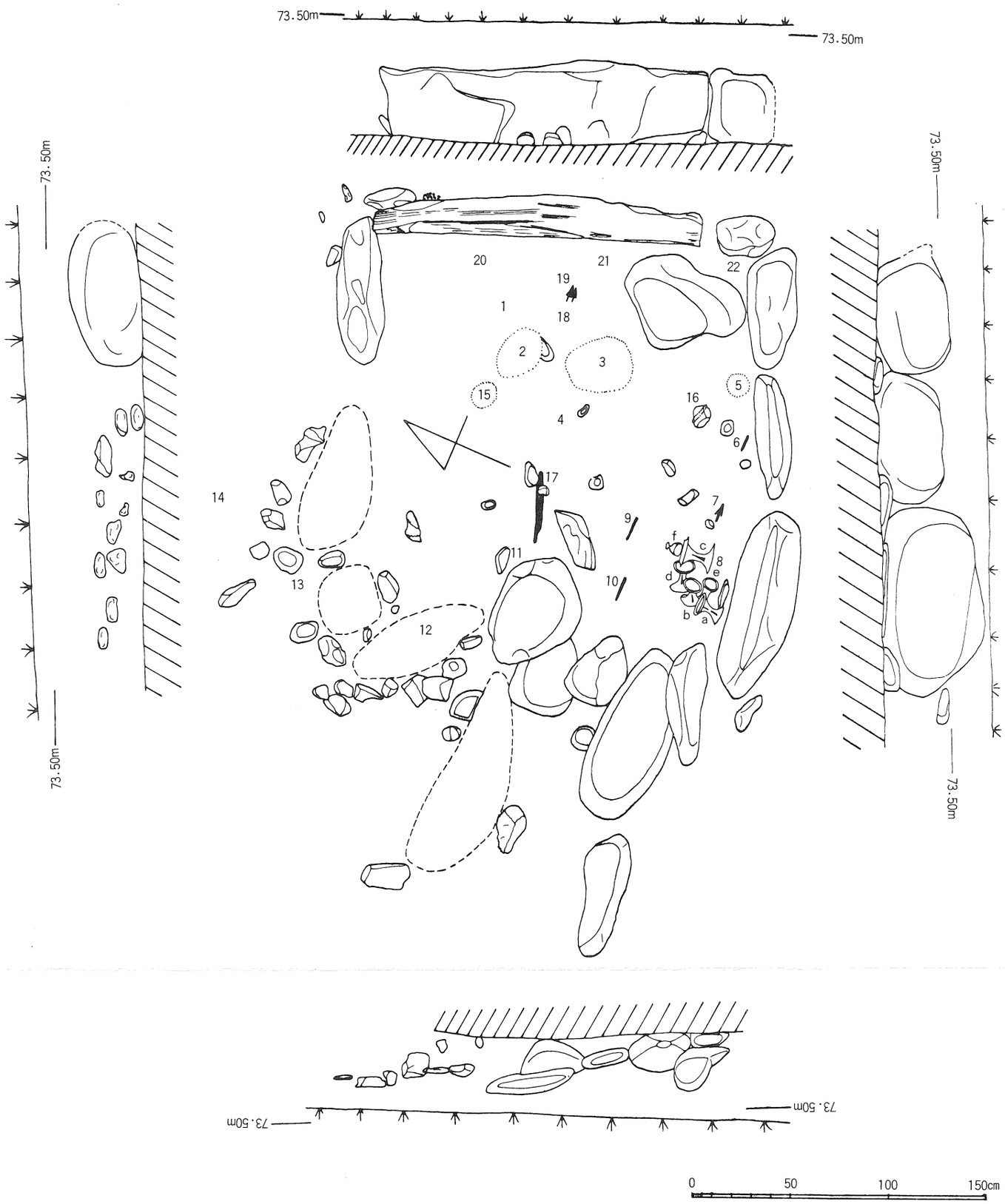
８２：鉄鏃（出土地点⑲）
有茎鏃で現存長 9.5cm　鏃身 5.8　茎長 3.7　身幅 2.1　身厚 0.2を測る
鏃身断面は扁平な楕円形、茎は扁平な長方形をなし、樹皮状のものが覆っているが、茎端部断面は楕円形となる。

８３：鉄鏃（出土地点⑲）
有茎鏃で現存長 10.4cm　鏃身 5.5　茎長 4.9　身幅 2.2　身厚 0.2を測る
鏃身断面は扁平な楕円形、茎は扁平な長方形をなし樹皮状のものが覆っている。茎端部断面は略円形となる。

８４：刀子（出土地点⑯）
現在長 11.8cm　刃長 7.3　茎長 4.5　身幅 1.1　身厚 0.6　反り－なし、茎反り－なしで平造（断面が二等辺三角形）

８５：刀子（出土地点⑩）
現存長 14.9cm　刃長 10.0　茎長 4.9　身幅 1.05　身厚 0.05　反り－なし、茎反り－なし、平造。

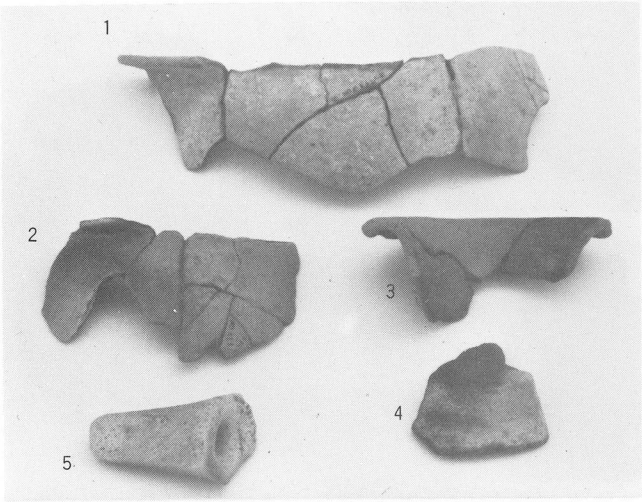
８６：鉈（出土地点⑨）
現存長 14.5cm　刃長 7.7　茎長 6.8　身幅 1.8　身厚 0.5
刃部中央部より曲折している。刃部断面長楕円、茎部断面長方形

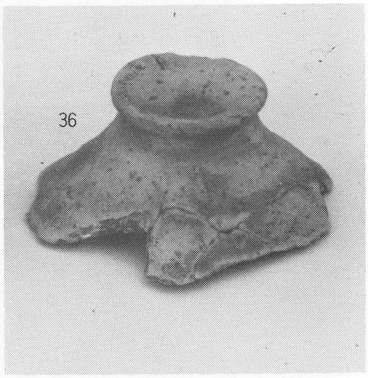


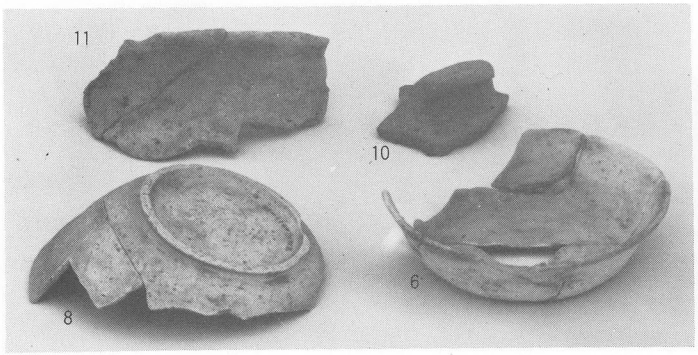
（註）　右側壁には根石が在るが、遺物を取り上げる時点では現われていなくて平面図の中で記入漏れとなっている。巻頭の第１図を参照されたい。又、奥壁右隅にある巨石は上部より転落したものと判断して第１図には記入していない。

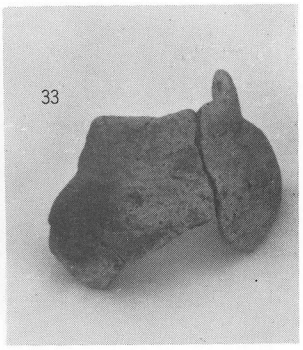
第21図　西ノ岡古墳石室展開図及び遺物出土状況図

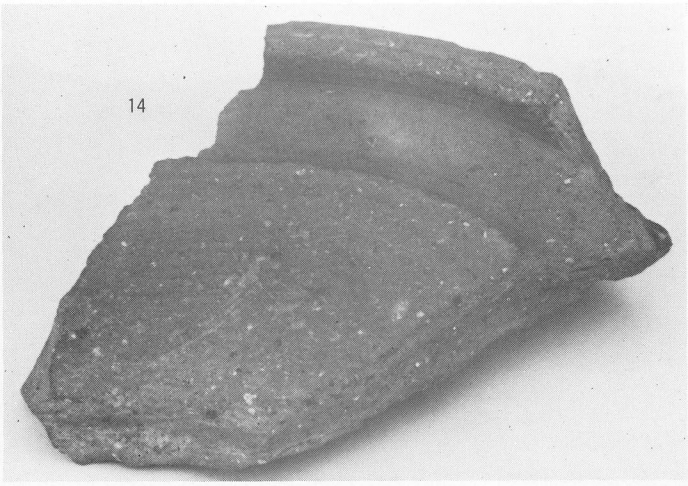
西ノ岡遺跡遠景

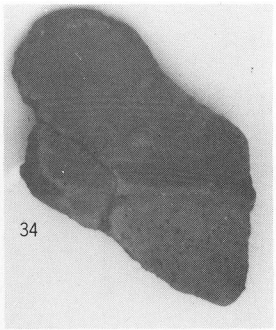


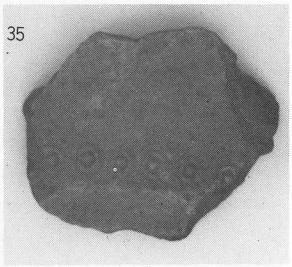




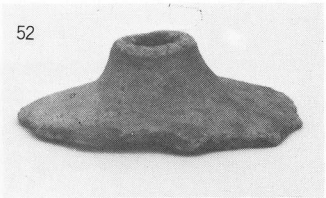


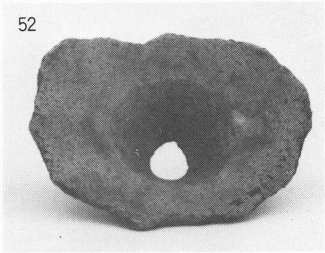

14

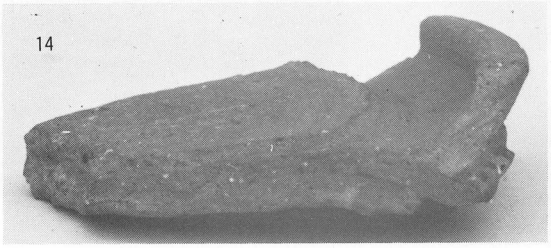

34

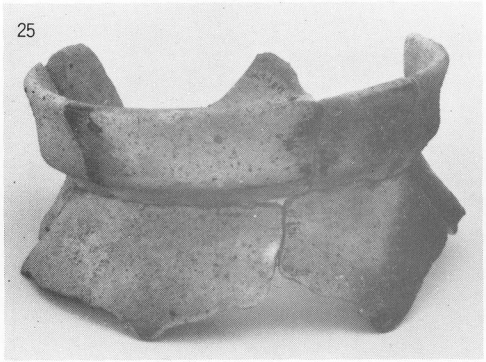

35

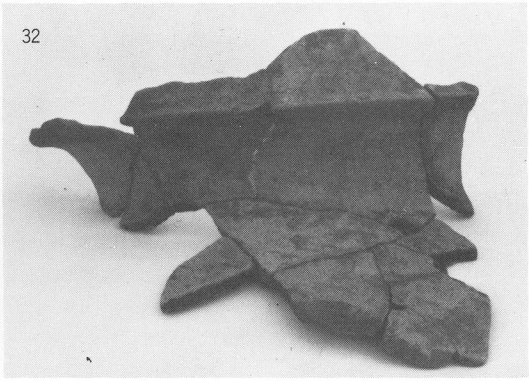
14

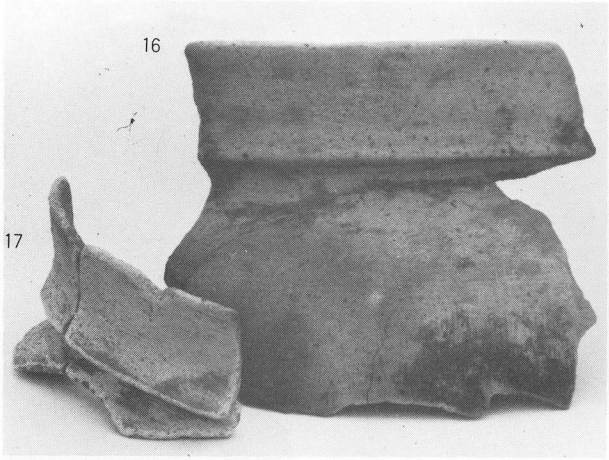

52

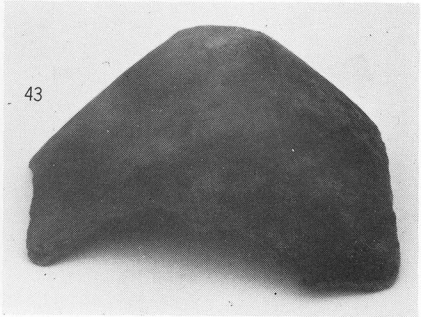

52


14

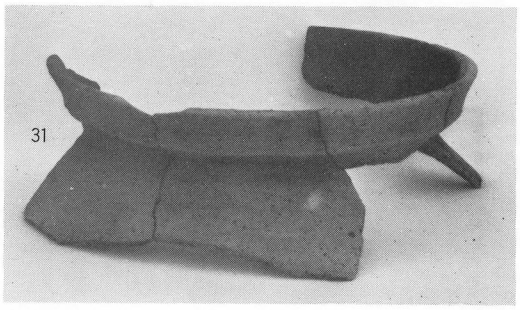

25

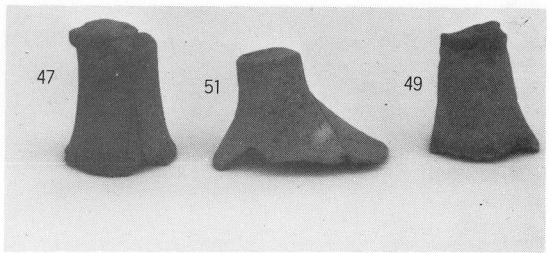

32


16
17

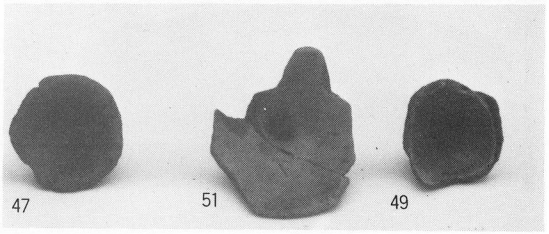

43

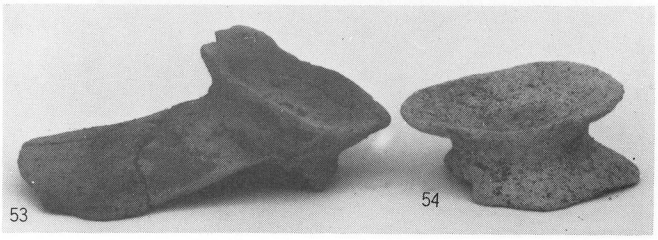
50

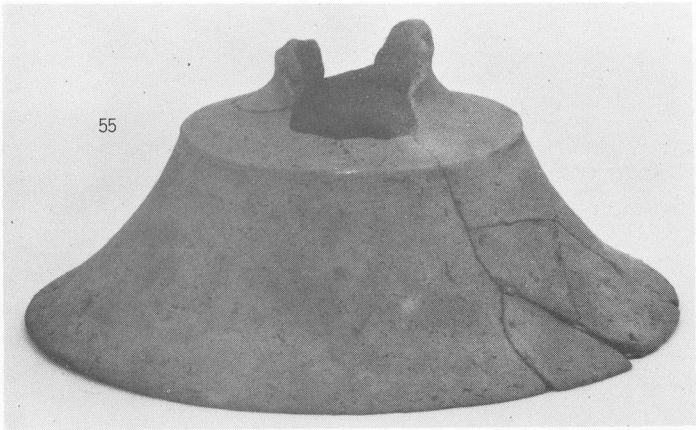

31


47
51
49

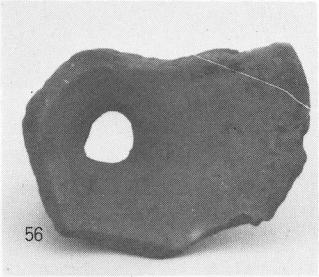
50

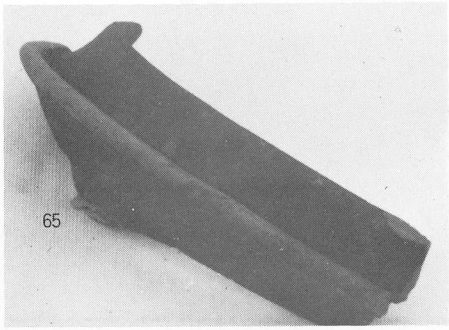

47
51
49

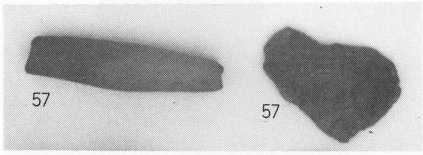

53
54

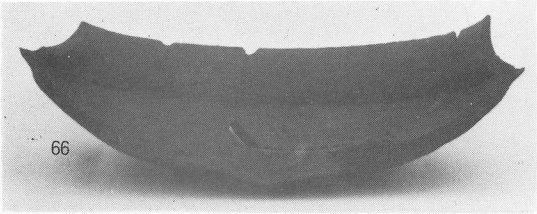

55

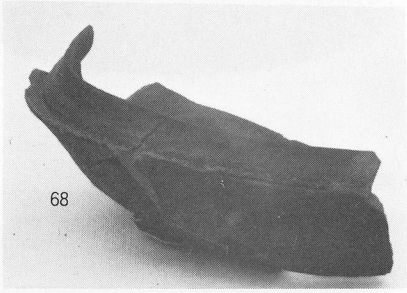
56

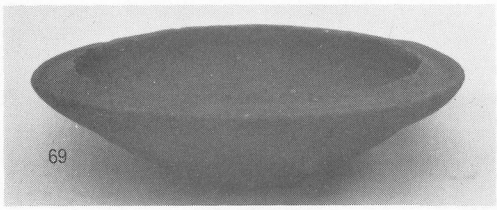

56

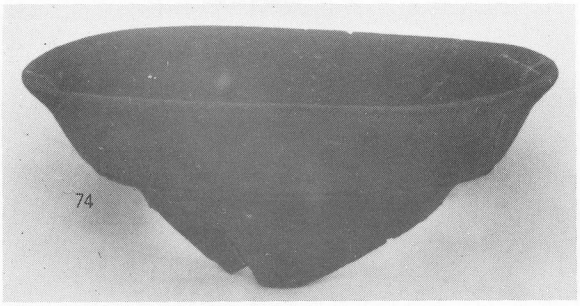

65

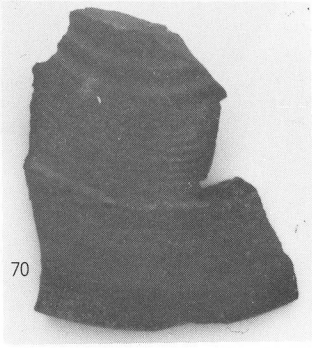

57
57


66


68


69


74


70

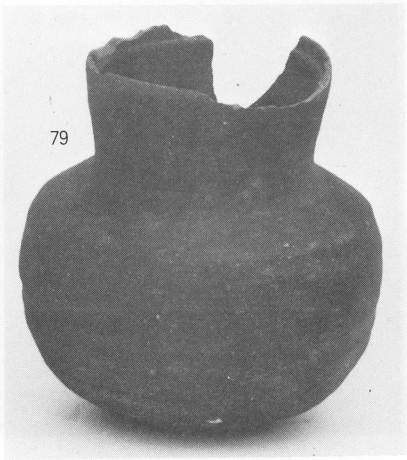
60

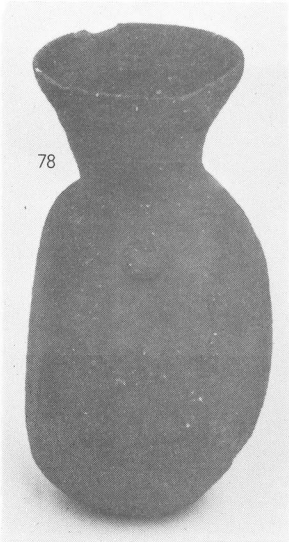
61

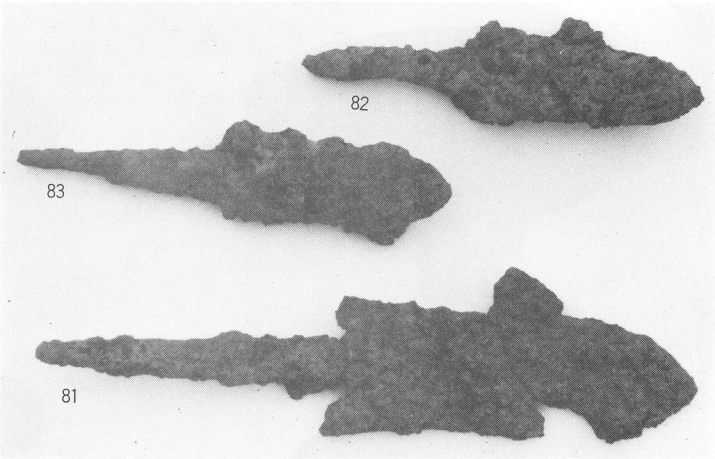
62

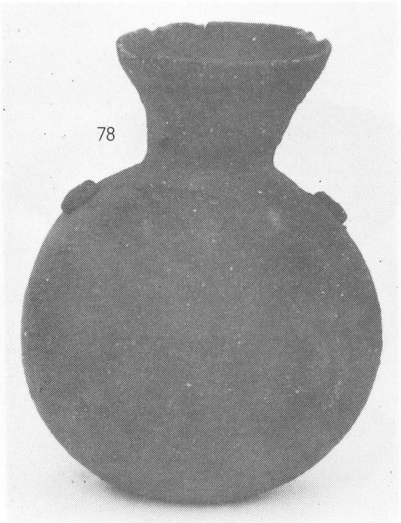
63

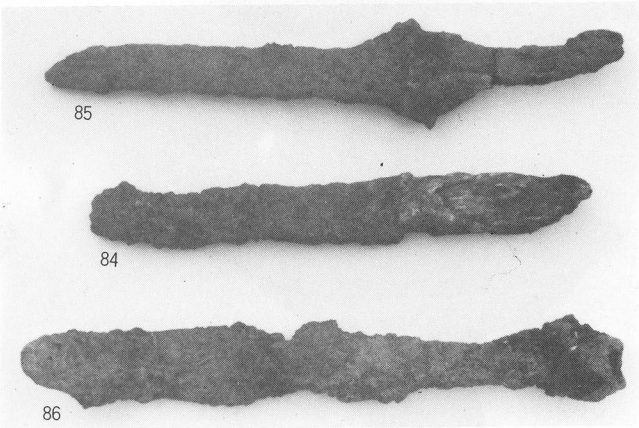
64


79

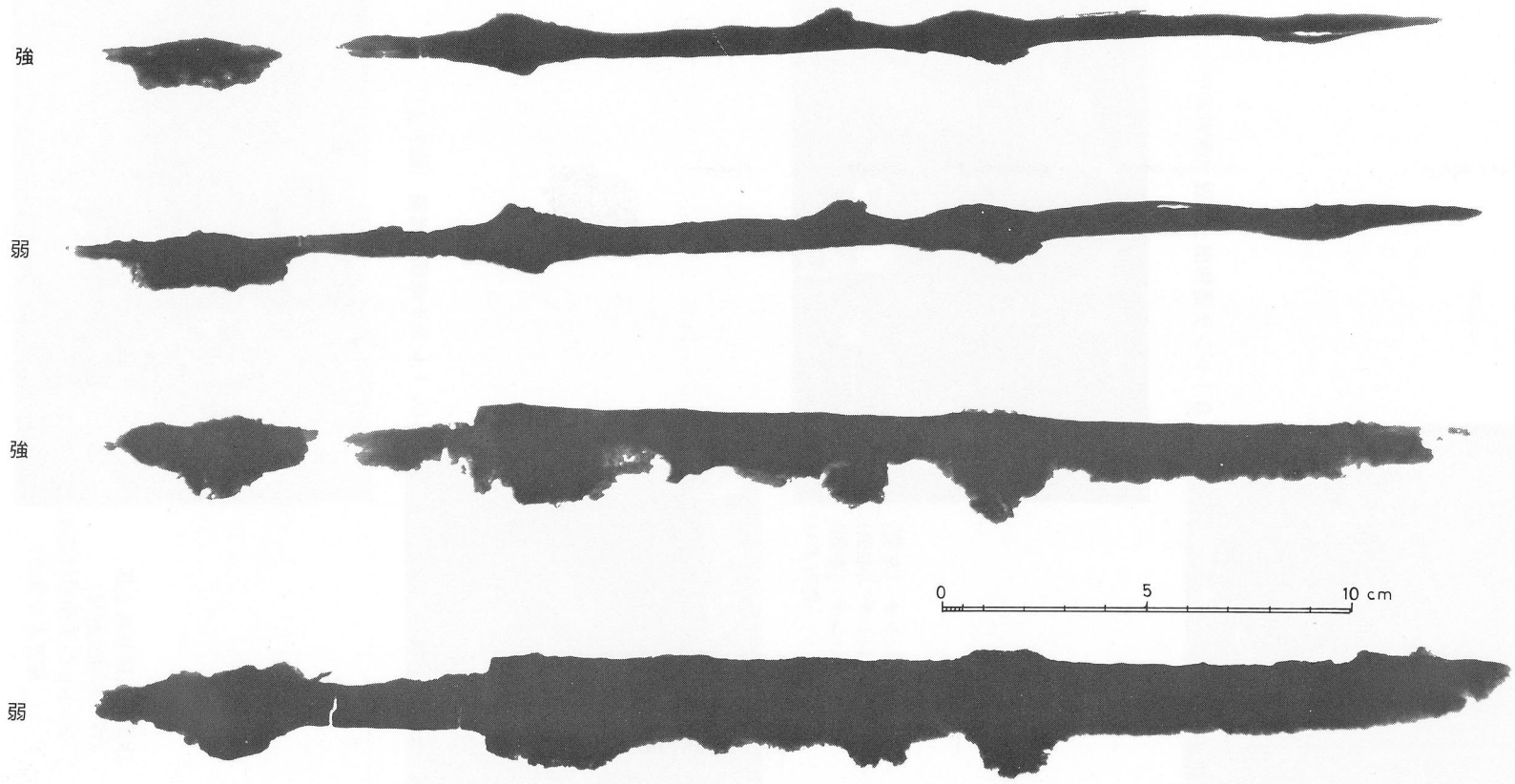






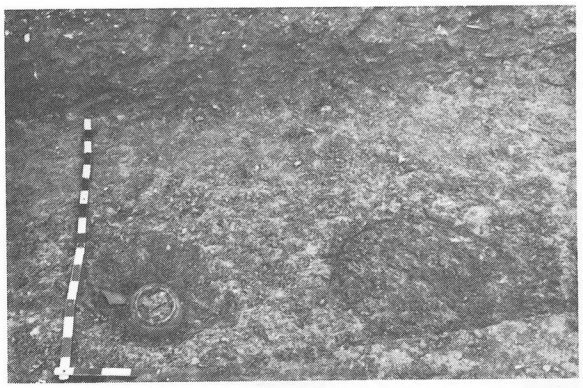


A トレンチ（左側）
B トレンチ（右側）
発掘風景（南方より）

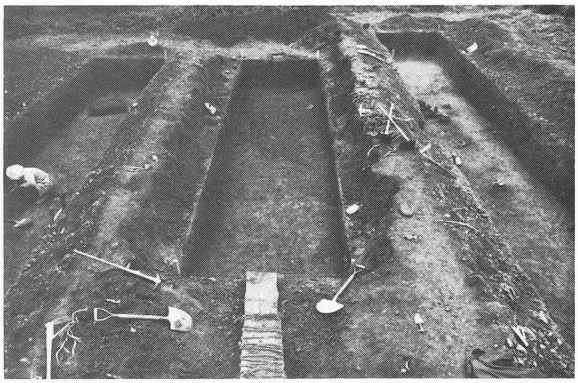


80

西ノ岡古墳玄室内17番より出土の直刀（強弱二種のＸ線撮影による）



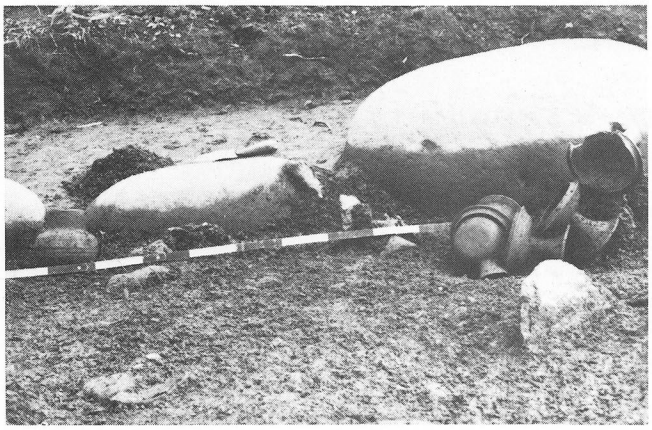
Bトレンチ遺物出土状況（西方より）



D_2トレンチ（左側）
D_3トレンチ（中央）
D_1トレンチ（右側）
（北方より）

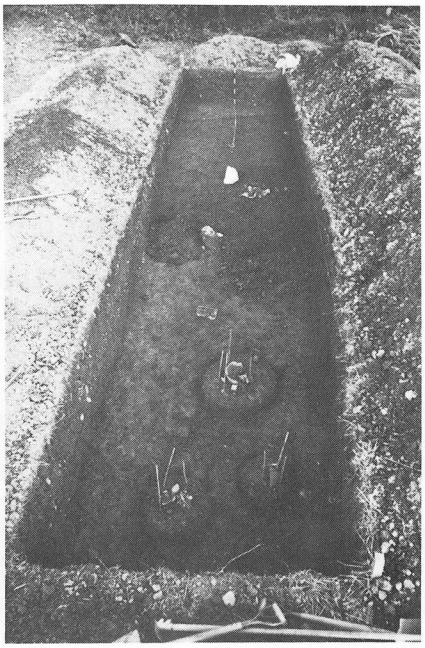
D_2トレンチ南隅木棺墓（西方より）

木炭・丸底気味土器
（弥生末期住居址）
（D_1トレンチ南半付近を
東方より見る）

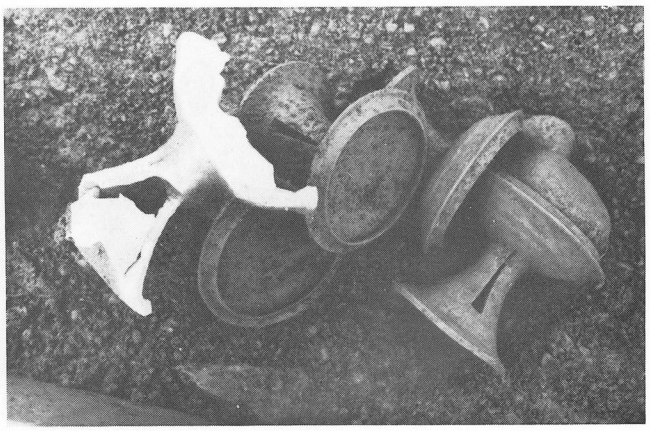


西ノ岡古墳右側壁遺物出土状況
（北方より）

西ノ岡古墳奥壁付近
鉄鏃出土状況



Fトレンチ遺物出土状況（西方より）



西ノ岡古墳右側壁高坏出土状況
（真上より）

あ　と　が　き

西ノ岡遺跡は、鳥取層群下部層を基盤とする沖積扇状地(風成の大山降下火山灰は見られない。)にあり、北方に広がる中位段丘、低段丘の八東川河岸段丘面上には奈良時代の条里遺構の存在する可能性が指摘されている。

この遺跡で検出した遺構は、Bトレンチで奈良時代の掘立柱穴跡、D_1 トレンチで弥生時代後期から末期の竪穴式住居址（1基)、E_2トレンチ東方より両袖と推定される横穴式石室を1基(周溝は確認できなかったが、D_1 トレンチ北端部が急激に落込む事から何らかの排水施設が存在する可能性を有する)を検出し仮称、西ノ岡古墳とした。この古墳では追葬の瘍跡を認め、築造時期を6世紀前半、造営時期を6世紀全般から7世紀初頭と推定した。

また、A_1・A_2トレンチでは不明確ながら方形の住居址状遺構を認め、Fトレンチにより扇央付近にも遺構の存在する可能性を確認し、これにより西ノ岡遺跡の位置する扇状地全域に渡って弥生後期から古墳時代前期の住居址の存在する可能性が指摘できる。

そして、C_2 トレンチより円面硯の破片を検出し、これによりC_2 トレンチ南方の山寄りに奈良時代後半期のこの付近の主要な建造物の存在する可能性を指摘できる。

以上より、西ノ岡遺跡は弥生時代後期から古墳時代前期には住居区として使用され、古墳時代後期には古墳が造営され、奈良時代後半期から室町時代にかけて再度住居区として使用された可能性を有する遺跡であると推定する。

最後に、西ノ岡古墳より出土した直刀の原寸でのX線撮影を快よく引受けて頂いた松下理一(鳥取赤十字病院歯科医）先生に記して感謝致します。

註①　郡家町教育委員会(1979)：土師百井廃寺跡発掘調査報告書Ⅰ

註②　岩永　実(1959)：鳥取県における条里地域の研究(第Ⅰ報)　鳥大学芸学部研究報告 vol－13P 257～276

註③　船岡町教育委員会(1980)：牧野遺跡発掘調査報告書

Dトレンチにて作業員一同記念撮影

鳥取県八頭郡船岡町
西ノ岡遺跡発掘調査報告書

昭和56年３月20日

発行・　鳥取県八頭郡船岡町船岡５３９
編　集　船岡町教育委員会
印　刷　鳥取県鳥取市相生町２丁目413
巧印刷